

民 話 編



みやざきの民話について

宮崎県の民話は、雪国の民話とは違う味わいがあります。民話は、人が言葉をもって、心を語る文学です。宮崎県には、光いっばいの太陽、青い空、青い海、そしてたくさんさんの縁があります。その環境の中で生活してきた人々が、語り継いできた民話が伝わっています。民話は、「民間説話」の略称です。民話の代表的な三つは、昔話・伝説・世間話です。民話の一つ、昔話は、伝説・世間話と語り方に違いがあります。昔話の名称へとつながる「昔、昔あったげな」で語り始め、語り終わるさいは、これでおしまい「と申すかつちり」や、「めでたしめでたしじゃが」のように、めでたい話だったよねと語り納める、決まり文句をもって語ります。しかし、宮崎県の語り手は、語り始め・語り納めを、昔話の中に、きちんと語りこまないことが多いようです。でも語り手の中には、「昔・あんなえ昔・なあに昔があったげな・昔昔・昔昔の話じゃ」と語り始め、「こりぎりの話」と語り納める語り手もいます。また語り納めを「ともうすかつちり・ともうすかつちりかつちり山に火がついた・とんぼしかつちり・とんぼしかつちりば

いばい」とする語り手もいます。

このように「昔話」と、一口では言い切れません。語り手により語り口は様々であり、柔軟性を持って語り始め、語り納めという形式をどのように語るかも、昔話の面白みの一つです。

昔話の面白みは、宮崎県民話二十話をみてもわかります。「松や橋の由来を語る」「琴ひきの松」「夜泣橋」、人と山の神のかかわりを語る「くさい風呂」、天狗を語る「馬渡天狗」、狐が主人公の「万太郎狐」と面白い話も、たくさん語り伝えられています。他にも、「人を語る」「よだつごころの話」「石屋が一番」「三年寝太郎」「すねこ太郎」「うるし兄弟」、お爺さんお婆さんが主人公の「ばつちよ笠と地藏さん」「古屋のもり」、嫁さんを主人公とした「屁ひりの嫁さん」「食わず女房」、物事の由来を語る「そばの茎なせ赤い」「海の水なせ塩からい」の何故を解く話、川―黒雲の上―竜宮―船の中とダイナミックに展開する「はなし」、宮崎県の頓知者・半ぴどんを語る「跡江の半ぴどん」、巨人伝説「大人弥五郎どん」、ヒヨオスンボと呼ばれる河童の活躍する「日向の国のひよおすんぼ」も語り伝えられています。

昔話と聞くと、まずは、お爺さんお婆さんが登場する

話はなしと思おもいがちかもしれませんが、宮崎みやざき県の民話世界みんわせかいには、大人おとな・河童かっぱ・頓知者とんちもの、そして話はなしの中なかでは鬼おに・雷かみなり・どん・天狗てんぐ・鬼婆おにばば・地藏じぞうさんと、魅力的な存在みりよくてきが語りこまれて

います。

宮崎みやざき県の民話世界みんわせかいは、多種多たしゆたさい彩さいです。

昔話むかしばなしの代表だいひょうてきな話はなし「桃太郎ももたろう、カチカチ山やま、猿蟹合戦ざるかにがっせん、舌切雀したきりすずめ、花咲爺はなさかじいさん」は、五大ごだいお伽話とぎばなしと呼ばれて

います。そのうちそのうちの舌切雀したきりすずめと花咲爺はなさかじいさんは「隣となりの爺じい型がた」と呼ばれる昔話むかしばなしです。

「隣となりの爺じい型がた」は、「昔々むかしむかし、ある所ところに、お爺じいさんとお婆ばあさんが暮くらしていたげな」と語り始はじめる昔話むかしばなしです。まず登場とうじようするお爺じいさんお婆ばあさんは、信心しんじん深く、働はたらき者もので人ひとが良よいと描えがかれたりします。その二人ふたりの行いいにより、富とみや幸さちを得えます。しかし、その姿すがたを見て羨うらやんだ隣となりりのお爺じいさんお婆ばあさんは、信心しんじんなど全まくなく怠なまけ者もので人ひとが悪わるいのです。成功せいこうした二人ふたりの物真ものまね似にをして失しっばい敗ばいしてしまうと語かたるのが、隣となりの爺じい型がたです。

昔話むかしばなしは、行こう為いを語かたる物語ものがたりです。登場とうじようする人物じんぶつの行こう為いをお通として、聴きき手ては、成せい功こう・失しっばい敗ばいや良よいか悪わるいかを、自じ分ぶんの物語ものがたり世界せかいの中なかで認みとめてゆよくのです。

笠地蔵かさじぞうの「ばっちよ笠かさと地藏じぞうさん」も隣となりの爺じい型がたです。語り手かたは、話はなしの最後さいご「人ひとん真ま似ねすつと糞くそかぶり」と、

人真ひとまね似には駄目だめですよと語り納おさめています。昔話むかしばなしと聞きくと、ついで「昔話むかしばなし―雪国ゆきくに―困いろり炉裏り」の組くみ合あわせを連想れんそうしてしままいます。となると、笠地蔵かさじぞうの昔話むかしばなしは、絵本えほん『かさこじぞう』からも、雪ゆきが降ふっていないと語かたれないのではと思おもわれがちです。しかし「ばっちよ笠かさと地藏じぞうさん」のよう

に、雨あめでも昔話むかしばなしとして成なり立たつのです。

昔話むかしばなしは、ちを、ことばで語かたるものです。〈ち〉は血ち、

すなわち人間にんげんであり、暮くらしている土地とちです。そして〈こ

とば〉とは、その血ち（語り手て）と土地とちに支さえられた方言ほうげん

です。その方言ほうげんで語かたるのが昔話むかしばなしです。

皆さんも、五人ごにんの語り手てによる昔話むかしがたを聴きき、二十話わ

監修かんしゆ
矢口裕康ひろやすさん
（南九州大学みなみきゆうしゅうだいがく教授きょうじゆ）



琴ひきの松

語り師 赤澤 照野さん



むかしむかし、土々呂ん、霧島山にや大けな枝ぶんのいい松があつたげな。

風じ、枝が揺るつとまつで琴をひくゆな、いい音がしよつたげなかいよ。

村人どんは、こん松んこつをば、琴ひきの松ち言いいよつたつと。

こん村ん、太一いう男ん子が或る晩げ、爺さんと、舟じかい烏賊釣りん出かけたげな。

陽がとつぶり暮るつとを待つて、爺さんは漁火どん焚ち、烏賊釣りゆ始めたつと。

そん側じ太一や、こつくりこつくり、居眠りしよつたげならよ、爺さんが、

「こら、太一よい、太一、はや起けちみよ。そこん、妙な舟が浮かんじよつとよね。お前や、ちよこつと中を見て来てくれんか」

太一や、気味が悪いと思つたげんどん、そん屋形船んゆな舟ん飛び乗つていくと、御簾を開けち、ひつたまがたつと。

中は何とも言えん、いい匂がしよつて、金欄緞子ん布団に

若けえ女人人が寝ちよつてよ、側にや、見たこつもねえゆな立派な琴が置いてあつとと。

「爺さん、来てみらつしやい」
太一が言つと、爺さんは、うるたえまくつち飛び乗つて来て、

声をかけてん返事もえせんごつ、ぐたあつとしちよる娘をみて、
「太一よい。こら、烏賊釣つどこじゃねえわ。こん娘をば、

早よ連れち戻らにや、えれこちなるもんね」
爺さんは、娘ん舟をきびつুকつと、必死じ櫓を漕ぎ浜ん

こらんつけち、そこたりおつた人どんに、娘と琴をば、めんめ方まじ運くじもるたげな。

そいかいこつち、太一方んもんは皆んなし娘の介抱をしよつと、日増しん元氣んなつていく姿を見て喜くじよつたつと。

ところが或る晩、ひよかつと、ガツタ、ガツタ、ガタガタ、立つちやえおらんゆな激しい地震がして、ドーンちゆう地鳴り

りともん波がサアツと引つしもたつと。すつと、沖ん方じやもう、まっ黒りい壁をつきたてたごして山んゆな津波が

押し寄せち来よつとと、そりゆ見た人が、



【松】季節に関係なく緑の葉を茂らせることから、長寿の象徴とされる、竹、梅と合わせた「松竹梅」という言葉はおめでたい意味で用いられる。

注① 御簾・・・すだれ

注② 金欄緞子・・・高価な織物

注③ めんめ方・・・自分の家

注④ まあいと・・・丁寧に

「津波が来つどお」

ち叫ぶ声ん、太一んおつ母さんも娘をかるち山に登つていて
松ん根元ん座らせち、琴も側ん置いてやつたげな。

じゃけんどん、もうそんな時にや津波やよ、白波ゆ立てち、

ゴオーツ、ゴオーツ押し寄せち来ちよつてよ。

山はもう沈むばっかいなつちよつたと。

そんな時、今まじ手を合わせち祈るごつしちよつた娘が、髪
ん挿しちよつた櫛をば、いきなり津波めがけちポーンと投げ

こむと、琴をひき始めたつと。

琴ん音色ん流るるまっ暗な山ん中じ、ちいつとばかりの雲
ん切れ間かい覗じた月んよ、照らし出された娘ん顔は、こお
らもう、このせんもんた思えんごつ美しかったげな。

そんなうち、不思議なこつにや、琴ん音色ん合わせるごして、
津波がサーツと引き始めち、夜が明けたときや、いつもん静

かな海んもどつちよつたげな。

皆じ駆け寄つてみつと、娘は琴ん凭れたなり、息が絶え

ちよつたつと、誰かが、

「こら、こん娘は琴ひきん松ん精じやつたかも知れんのお」

言うたいして、皆しまあいと葬るうちやつたげな。

そりかいこつち、こん松んこつをば「琴ひきの松」いうた
いして、手を合するごつなつたそうな。

ともうすカッチン。



くまの風呂

かた語り
なかつけのりこ
中武 軌子さん



むかしむかしの話じゃ、米良山の秋もいよいよ終わりに近づいて、美しい色のついた木の葉が、風に吹かれてパラパラと落ち始めておったげな。夏から木切りの山師どん達や、五、六人で山小屋に泊まりくうで仕事をしておった。

ある晩の事じゃった。山師どん達は、仕事の疲れでぐっすり寝込んでしまった。真夜中になって、どうしたこつかガタガタギンギンと、小屋が音をたてて動き始めた。

山師の一人、助蔵が、目を覚ましたげな。

「なんじやるかい、こらあこん音は」

そんなうちに、小屋がまだ大きく音をたてて、動き始めたげな。助蔵は、地震じゃとばかり思いくうで、ひったまがってとびおけたげな。何しろ辺りが暗いもんじやから、何がなんやらさつぱり分からさった。そんなうちに、

「どろんどろん、ガタンガタン」

と小屋がもうじきでん打ち廻るような大きな音がし始めた。

「おお、おい、はよ起きて見よ」

隣の若者をつつき起こしたげな。ところがじゃ、今までうなつておった音や家の揺れが、ピタツと止んだげな。

「おお、なんかい、どしたとかい」

と隣の若者が目を覚まして、起きてきたげな。助蔵は、

「今ままで、小屋が揺さぶれとつてどうにもこうにもならざったが、まちつとで小屋がいつくゆつとこじやったど」

「うそじやるが、なんのこつたねえじやねかい」

「そりがおかしいとじや、お前が目さみやたときから、うつ止まったじやがね」

そのうち二人の声に目を覚ました連れの山師が、ごそごそと起きて二人のそばまで寄つちいてきたげな。

皆が耳を澄ましたが、何の音もせさった。そこ辺りいっばい何かが落ちてたつちやがと言つて、皆に見てもろつたが何のことも無かつたげな。起こされた山師どん達は、ぶつぶつ言いながら布団にもぐりくうだけな。

明くる朝、皆が夜べのことを語つてみたが、とんとだちがあかんがった。その日の仕事は早よすんで、若者が晩飯つくりと風呂たきにうつたつたげな。夕さりになって早々と、

晩飯になったげな。飯くいの最中で、風呂加減を見に行つた者が、慌てまくつてつうできたげな。

「おお、早よ来てみや」

「何んしたとかい」



【米良の風景】

米良は日向神話で知られるイワナガヒメが傷ついた心を癒すため移り住んだ場所ともいわれている。



「だりか、もう風呂にひやったかいね」

「誰りがひやるもんか、親方もまだひやあれんとに、みんな飯くるとるじゃねか」

「そらそうじゃが、どしてんおかしいど。それに、ベトンベトンしとつとよね」

兄貴分の山師が走っていったって、風呂の中に手を入れてみたげな。

「ああん、こらなんか、ベトベトして臭せじゃねか」

「じゃろが、どしたちやるかい」

山小屋の使い水は、谷の水を懸桶で引いて使うが、風呂水は半日がかりで溜めて沸かした風呂で、入られんごつなつて、えらいこつじゃ。

「誰りが、こげ汚らきやたつちやるかね」

とうとう山師とんたちや、風呂に入ることでもできなかったげなが。明くる日仕事に来た狩りの上手な人に、夜んべの事を話したら、

「そら山神じゃ、カリコボウズじゃが」

「なんかの、その山神とか、カリコボウズとかいうもんな」

山師の男は、カリコボウズの事を話し始めたげな。山師とん達は、仕事を止めて山師の周りに集まり始めたげな。山師の男は、「カリコボウズは山神じゃ、春の彼岸から秋の彼岸まじや川の中に住む水神じゃ。そして今度は秋の彼岸から、春の彼岸まで山に住むといわれてるもんじゃ。そん時や山神ちゆうて昔から言いおらいたもんじゃあ。山に働くもんは皆、山で仕事をさせてもらいます、と断り言つことじゃ」

「そら、どげすればええどかいな」

「小屋に戻ったら、木戸口や小屋の外回りの四隅や水場に、

塩や、米と焼酎をあげて、

『山の仕事を成就させて下さい』

と、ちゃんと人に話すように言いさいすれば、こいほど人の言うことを聞いてくれるもんな、おりやらんど。そして風呂んフタどま、風呂に入らんときや、ちゃんとしくもんじゃあ、お前いどま

「そんなら夜んべの音は、山神じゃつたつちやる」

山師とん達は、黙って煙草を吸いながら聞きちよつたげな。

山師とんは、

「カリコボウズに、断りなしに通り路に小屋を建つれば、時々上げていたずらをせらるつとじゃ」

山師とん達や、

「ええことを教えてもらうた」

ち喜くうで、山師とんに言われた通り断りを言い、許しを受けたげな。

その晩かい、何の事も起こらんがったげな。山師とん達や、冬いっばいで仕事を成就して、戻らいたつちゆうこつちやげな。と、申すかつちん。



注① 山師・山の仕事をすると

注② ひつたまがって・驚いて

注③ いっくゆつとこ・壊れる

注④ うつたつた・始めた

注⑤ 夕さり・夕方

注⑥ えらいこつじゃ・大変なことだ

注⑦ 彼岸・春分の日と秋分の日をそれぞれ中日とする各七日間

注⑧ 木戸口・庭などの出入り口

注⑨ 成就・物事を成し遂げること

夜泣橋

語り
林 都子さん



佐土原町那珂地区に信成町と岩見堂ちゅうとがあるが、昔はさびしい村里じゃった。

こん佐土原は、昔は寺や神社が多いして。信成町にや今ん那珂小学校横に松月寺、岩見堂には福城寺ちゅうお寺があつた。そして、そん真ん中に木ん橋がかちよつたとよ。

こん福城寺前は、佐土原かい宮崎・飢肥に通じ、でじな街道じゃった。昼間はじよつさんな人が通り、茶店も出て、水もぎよつさん出るもんじゃかい、馬の水呑み場としても、そりや、てげにぎやけかつたげな。けどん、夜になつと、まわりは灯一つねして、そりやさびしい、人も通らん村里じゃった。

こん真つ暗り夜中に、一人の女が星ん明かりを頼りに、裸足ばらで急いでこん木の橋に走り寄つて、欄干の柱になんかかつて、そん柱ん角を腰差しの鎌でこさぎとり、そん木くずを、でじにふつくるん入れると、掌を合わせてそりりと立ち去りやつたげな。あたりはしいんしちよつて何も見えん真つ暗い道を、髪ん毛を取り乱して急いで自分がたに戻りやつたげな。

家が近うなつてくると家ん中かい、赤ん坊が火がてちたご

つ泣くとが聞こえてきた。女はそん赤ん坊のおつ母さんじゃ。もうたまらじ、くくつ戸を開くつと、家ん中じゃ、泣いちよる赤ん坊ん横で、婆さんが一人、夜泣きせんごつ頼みに出かけて行きやつた嫁女が戻つてくつとを、じいつと待つちよる姿が目んかかつた。

小灯のゆるつ中、おつ母さんは、でじに持ちもどつた柱ん木くずを煎でて赤ん坊に飲ませ、それかい、他ん木くずに火をてつて、明こつ輝いちよる炎を泣き叫んじよる赤ん坊面ん上や、胸、脚ん上にかざして、輪を描くごつゆるつと、大つこねえまわし始めやつた。すつと、今まで火がてちたごつ泣いちよつたつがピタリと泣き止み、すいすいとした寝息に変わり、それからぐつすり眠つてしもたげな。おつ母さんは喜じホツと一息しやつた。そして、久しぶりん早よ早よ寝やつた。

「こん橋が我が身を削り、燃え尽きて、夜泣きをなおしてくりやつたげな」

というのが里の人たちに伝わつて、それかい夜泣きに苦しんじよるおつ母さんやおつ父さんが毎晩毎晩、こん橋に



【夜泣橋の付近にある祠】子育て地蔵が祀られている。



- 注① じよつさん・・・たくさん
- 注② ぎようさん・・・たくさん
- 注③ 欄干・・・ですり
- 注④ なんかかき・・・寄りかかつて
- 注⑤ 腰差し・・・腰に差す短い
- 注⑥ こさぎとり・・・削り取つて

通う姿が多いかったげな。

こんげな話を口伝えに聞いた双子を持つおっ母さんが、どんげなわけがあったちやるかい、そん一人の赤ん坊を誰ん分注⑧からんごつ夜中に、こん橋注⑨下注⑩に置いて、優しゅう面注⑪ん上注⑫やごてん上をなでて、赤ん坊に手を合わせて戻りやつたげな。

赤ん坊はいつときや泣かんかったげんど、そんうち夜どおし激しゅう泣き続けた。里ん人注⑬たちは家々で、

「どつしたつちやるかい。今夜はえれえ激しゅう泣き続けたちよるが、もぞなぎもんじ注⑭や」と心配しおりやつた。

夜が明くつと里ん人たちや、すぐに橋に行つてみやつたら、泣いちよつた赤ん坊はもうそこにおらじ、人々はめんめん注⑮に、

「星ん世界注⑯に昇つたちやるかい。うんにや、そんげなごつはあるか。心ある優しい人が拾ち育てやつとで連れて行きやつたつちやが」

と言いよりやつたげん、本注⑰当注⑱のことはわからんかったげな。

橋注⑲下注⑳で一晩中赤ん坊が泣き続けちよつたかい、それかい、こん橋を「夜泣橋」というようになったと言い伝えられている。

今注㉑「夜泣橋」は平成九年にコンクリートの橋に建て替注㉒えられた時、橋注㉓南側注㉔の岩見堂地区の人たちが立派な祠注㉕を建て、新注㉖しく子育て地蔵注㉗を祀り、そん横注㉘ん、こん「夜泣橋」の由来注㉙を記した碑注㉚を建てられやつた。

今も岩見堂地区の人たちや水や花をあげ、周りをきれいに
して、子ども達が元気に育ちますようにと守り続けておられ
るそうな。



注⑦ でじに・・・大事に
注⑧ ふつくるん・・・ふとこころに
注⑨ 小灯・・・小さな灯
注⑩ 火がてちた・・・火がついた
注⑪ ごて・・・体
注⑫ もぞなぎもん・・・かわいそ
うなもの
注⑬ めんめん・・・それぞれ

よだつごろの話

語り手 那須道子さん



よだつごろの話^{注①}をしてみろかいね。

むかし昔のこつちやった。宮崎のあるところに、よだつごろの男がおつたげな。そん男ん名はこん造というてな、毎日毎日日何もせじ、ごろんごろんしちよてよ、周りん衆が昼飯を食う頃になつて、やっと起きてくるようなよだつごろじゃつたと。

不思議なこつによ、ある日んこつ、朝早うに大淀川んねぎで口をばポカンち開けち空を眺めておつたげな。そこに村で一番の分限者^{注②}どんが、やつちきなつたと。

「こりや、ひつたまげたが、そきおつとは、こん造じゃねえか。なんごつちやな。こんげ早よかい」

と聞いたげな。

すると、こん造は、
「ほう、こりや分限者^{注③}どん。あんな今、俺ん所によ借錢とりが来てな、どしゆんこしゆんもならじ、こき逃げつきたつちやが。な、分限者^{注④}どん、教えちくだい。どんげしたら、そんげな分限者^{注⑤}どんになりやつたつな」

と言つと、分限者^{注⑥}どんは、

「俺の耳にも入つちよるが、お前や、陽も高うなつちかい起きてよ、一日中働かじ、ごろんごろんしちよるげなが、若け衆でどういうこつか。屋敷も田畑も荒れ放題ちゆうこつちやが。言い聞かする前に、お前ん家に行つてみるわい」

と言つたり、いやがるこん造の手を引つぱつち家さめ急いだけな。こん造の家に着くなり、分限者^{注⑦}どんはひつたまげたと。

「こりや、えれこつちや。こら、こん木どま、あつちこつち、やんかぶつち『よだき(木)、よだき(木)』ち言つちよつど。ほら、ゆう見てみよ。枝ん先じや、鳥が『借錢とり(鳥)、借錢とり(鳥)』ち鳴きよつど」

ち分限者^{注⑧}どんは、顔をしかめち言つたと。

奥の方じや、借錢とりの男が、まだこん造のおつ母と話しこんでおつたそつな。

「お前んとこは、田も畑もぎようさんあつどが。わしをそき連れちけ」と分限者^{注⑨}どんは言つたと。

分限者^{注⑩}どんは借錢とりとこん造が、でしなこつになると思いなつたもんじやが。

いつも働かじ、ごろんごろんしちよるこん造の田畑は草ぼうぼう



【大淀川】

山から切り出した木材の運搬路として使われた大淀川。現在の宮崎市瀬頭付近に木材加工所があったらしく、木材で成功した分限者が多かったという。

うじやつたと。(やいや、やいや、こりやぼくじや)と思っ
たごん造も、もう問しよくにや合わん。ごん造はしぶしぶ連
れち行つたげな。

分限者ぶんげんしゃごんは田たを見るなり、

「こりや、俺おれが思つたとおりじやわい。お前まえとごん田たは、『ひ
んだれた注⑥(田た)、ひんだれた注⑥(田た)』ち言いつちよるど。向むこ
方ほうに見みゆる丘おかまじ、『てにやおか注⑦(丘おか)、てにやおか注⑦(丘おか)』ち
おらびよるが。ゆう見てみよ。そき咲さいちよる花はなも、『ごんげ
なやぶん中なかじや、たまらん注⑧(蘭らん)、たまらん注⑧(蘭らん)』ち、言いつち
やつとかつと咲さいちよつど。まこち、もぞなきもんじや』
と言いつたと。

ごん造は、びんた注⑨を下さげち身みをこもうして聞きいたと。それ
を見みた分限者ぶんげんしゃごんは、西にしの方ほうを指ゆびさし続つづけち言いつたげな。

「ほら、見てみよ。霧島きりしま山やまも、ごん田たを見て、『のさん山(山さん)、
のさん山(山さん)』ち言いつちよりやるかもしれんぞ」

それを聞きいていたごん造は、今いままじ自分じぶんがしてきたこつを
(まこち恥はずかしいこつちや)と思おもつたと。

「もう、わかつたどが。なんでんかんでん、いつちやがいつ
ちやがですますつと、ごんげ草くさも生はゆつとよ」

と分限者ぶんげんしゃごんは、力ちからを入れち言いつたと。

「いいか、おれも若わけ頃ころかい、今いまごつ何なに不自由ふじゆうなく生いきて
きたわけじやねえ。貧乏びんぼうもしてきた。食くうもんも食くわじ、ひ
だり注⑩い思おもいもした。いいか、よく聞きけ。大事だいじなこたあ、毎めい
日にち毎日まいにちこつこつと働はたらくこつよ。大八車だいはちぐるまも心棒しんぼう(辛抱しんぼう)がね

えと動うごかんどが。よだきいこつも辛抱しんぼうして、きばらにや。木
も根ねも張はらにや倒たおるどが。人間にんげんもごんき(根気)が大事だいじじや。
どうじや、ごん造ごんぞう」

じつと聞きいていたごん造は、

「分限者ぶんげんしゃごん、まこちおおきに、おおきに。今日けふは、いい話はなし
を聞きかせちくだった」

と何なん度も頭あたまを下さげち礼れいを言いつたと。

それからと言いつもの、ごん造は生うまれ変かわつたごつして、
朝あさは早はやうから夜よるは夜星よぼしまじ、毎日まいにち日にち働はたらいたと。おかげ
で借しゃく銭せんも返かえし、三年さんねん三月みづきもたつと村むらで二番目にばんめといわれるほど
の分限者ぶんげんしゃごんになつたそうな。

うれしいこつにな、嫁よめを迎むかえ子こどもにも慮めくまれち、おつ母かあ
ともども、いつまでも幸しあせに暮くらしたそうじや。

めでてえこつちや。



注① よだつこる・・・なまけもの

注② ねぎ・・・そば

注③ 分限者ぶんげんしゃごん・・・金持かねもちち

注④ ひつたまげた・・・驚おどろいた

注⑤ やんかぶつち・・・枝葉えだはが繁しげりすぎて

注⑥ ぎょうさん・・・たくさん

注⑦ でじな・・・大変たいへんな

注⑧ 間ましよくにや合あわん・・・間まに合あわな

注⑨ ひんだれた・・・くたびれた

注⑩ おらびよる・・・叫さけんでいる

注⑪ もぞなき・・・かわいそう

注⑫ びんた・・・頭あたま

注⑬ こもうして・・・小さくして

注⑭ まこち・・・本ほん当とうに

注⑮ ひだりい・・・腹はらが減へる

注⑯ きばらにや・・・頑張がんばる

注⑰ おおきに・・・ありがと

馬渡天狗

語り
たけはら ゆきこ
竹原 由紀子さん



昔、村の人は、ふしつなことがあれば、
「天狗どんの仕業じゃ」

と言うておりもひた。天狗はな、空を飛び、火を自在にあや
ついななど、超能力をもつちよいと思われておった。

日本書紀には、太つとか星が、かんないどんのような音を
たて、ひん流れたと言われちよった。隋かい戻つきやつた僧

「曼」によつて「あまつきつね」とされたのが、天狗の起こ
りじやと言われちよる。

こん、宮崎県にも、そがらし天狗話が伝えられておりもす
が、霧島山を「おたこさあ」と呼んで崇めておった頃、天狗

どんなそがらしおいやつた。
まず、高原の天津坊の天狗どん、鼻が立派な天狗どんを

筆頭に、みやこんじよの京牟礼岡の天狗どん、よかにせでな
あ。須木村の大年山の天狗どんは、力持ちじやつたとい

話。えびの市の狗留孫山の天狗どんは、頭がよかつたげな。
霧島山のあたには、こげなそがらし天狗どんじやつた。

じゃつどん、こいかい話す三股の仮屋の高野の山、雪が峰
の近くに棲んじよつた馬渡天狗どんは、そげな天狗どんじ

ねかつた。木を切つたり、枝を下ろしたりの名人の木挽つどん

でございもひた。どんな難儀な枝ぶりの太つとか木でも、馬
渡天狗どんな、よか形の枝ぶりにしてしまつ木挽つどんで、

みんなから頼りにされておりもひた。木に登つ時には、山
猿よりも早よ、下りる時は風のようにすつと、誰にも負けん

技をもつておいやつた。
そげなある日、お城の殿様から呼び出しがかかつてきた。

お城の近くの太つとか木が、影をさすやら、夜には、お城の
壁を風に吹かれた枝がギギーギギーと壁をこすり、眠れんよ

うになつた殿様は、
「誰か腕のよか木挽きを見つつけきい。城に傷をつけんよう

に枝をおるせ」
と命令しもした。

「だいか、腕んよか木挽つどんを知らんかあ」
と村に家来がやつてきました。

「そりやあ、馬渡天狗どんしかおらん」
白羽の矢をたてられた天狗どんな、お城の木にスルスルツと

登り、壁に傷一つつけんじ、あつという間に仕事を終えた。



【馬渡天狗を祀つた祠】
高野山中にある馬渡天狗を
祀つた祠。今にも天狗が現れそ
うな雲囲気である。

「こりやあ、立派な木挽っじや。馬渡天狗、なんでん欲しいもんを言え。やつど」

木の下から天狗を見上げて殿様がここに顔で褒める。集まった村人もみんな喜んせ、手を叩いて見上げてくれちよる。天狗どんなうれしくてたまらんかった。

馬渡天狗どんは、一仕事の後、煙草を吸う癖があつて、こげなよか日の煙草はうんめかろうと、木のまたに足をかけ、腰のいんすからキセルを取り出し一服した。

「こりやあ、うめえ。うんめなあ」

いつもは、頭を地べたにこすいつけ、殿様の顔なんそは見られんのに、今日は木の上からみんなを見下ろして吸うたはこの味は、格別じやつた。

「もう一服」

とキセルに残っている灰を木の幹にぼんぼんと打つて、灰を落とした。これがいかなかった。スーッと落ちてきた灰が、殿様の月代に落ちた。火は残つちよらんと思ちよつたが、火種が残つちよつた。一時して、なんと殿様の月代からもくもくと煙が上がり始めた。

「あつちつちつ」

家来があわてて消そうとして、たんこの水を殿様の頭にひっかけた。

「なんちゆうおどもんか。おりてけえ」

殿様は真つ黒腹かき、おらびやつた。

「打ち首じやあ。打ち首じやあ」

天狗どんな、ひつたまがった。まさか吸殻の灰に火が残っていたなんて、それが殿様の大事な月代を焼くことなんど考えもせんかった。

まつぶなつて木から降りると、頭を地にこすいつけて詫ひもひた。「許さあん。切腹じやあ」

周りの村人は皆で殿様に馬渡天狗の許しを乞い、村から馬渡天狗がいなくなつたら、山が荒れてしまつと、一生懸命頼みもひた。殿様は罪一等を許し、それでも高野の山での切腹を命じもひた。

馬渡天狗どんな、なんも言い訳をせじ、自分の不注意を詫び、高野の山に戻り、切腹したのでございます。

「あんまり、ぐらしこつじや。残念じやつたやろう」

と村の人たちは、馬渡天狗どんが一番好きじやつた飯屋の松の近くの竹林の中に祠を建てて、祀つて霊を慰めることにしもひた。それから、三百年余り経ちもひた。

木の枝が風もないのに、ゆさゆさつと揺れたり、野原で草を食べている馬が、耳をぴんと立てて、背中をぶるぶるつと震わす時は、馬渡天狗どんが遊び来た今も言われちよる。飯屋の高野の山にある祠は、今も村の人の手で守られておるのでございます。



- 注① ふしつなつ・不思議なこと
- 注② 太つとか・大きな
- 注③ かんないどん・雷どん
- 注④ そがらし・たくさんの
- 注⑤ よかにせ・ハンサム
- 注⑥ じやつどん・しかし
- 注⑦ 馬渡つどん・木こり
- 注⑧ 白羽の矢をたてる・多くの中から特に選出される
- 注⑨ うんめ・おいしい
- 注⑩ いんす・煙草入れ
- 注⑪ 格別・特別
- 注⑫ 月代・前額部から頭上にかけて髪を剃り上げた部分
- 注⑬ たんご・木製の桶
- 注⑭ おどもん・横着物
- 注⑮ 真つ黒腹かき・とても怒つて
- 注⑯ おらびやつた・叫んだ
- 注⑰ まつぶなる・真つ青
- 注⑱ ぐらし・かわいそう

石屋が一番

むかしむかし、あつたげな。

石屋に三代目の孫がでけたげなが、その孫が、

「石屋は好かんが、石屋はせん」

と言つたげな。そこで、爺さんが、和尚さんとこさね行つて、

「うちの孫は石屋をせんと言つが、石屋をするごつ、げちしてくだい」

と言つたげな。そこで和尚さんが石屋の孫を呼んで聞いたげな。

「おまえは石屋を好かんごつ言つが、何になるつもりか」

「わたしは馬に乗つた武士になりてえ」

「なに武士になりてえ、それが一通りの心配があるが。武士の上には殿さまがおつて、そこ行けあそこ行けと言つて、ちつとん頭はあがらんぞ」

「そんならわたしは、その殿さまになりてえ」

「なに殿さまがいいかるうか。その殿さまの上には天下という人がいなるぞ」

「そんならわたしは、その天下になりてえ」

「天下になってみよ、天下の上によお陽さまという人がおるが」

「そんならわたしは、そのお陽さまになりますか」

「なにお陽さまがいいかるうか。むしろ干しちやかわかんと言つて、すぐに雲が出てくるが」

「そんならわたしは、その雲になります」

「なに雲がいいかるか。東から西から風が吹いてきて、思うごつ動かれもせんぞ」

「そんなら和尚さん、わたしはその風になります」

「なに風がいいかるか、西にも東にも大きな岩があつて、西へ行けば頭をこづき、東へ行けば向こう面を打つがよ」

「そんなら、その岩になろうかい」

「どうして、また岩がいいかるか。岩になつてみよ、石屋というえらいやつがおつて、毎え日毎え日、コッチンコッチン、切らるるがよ」

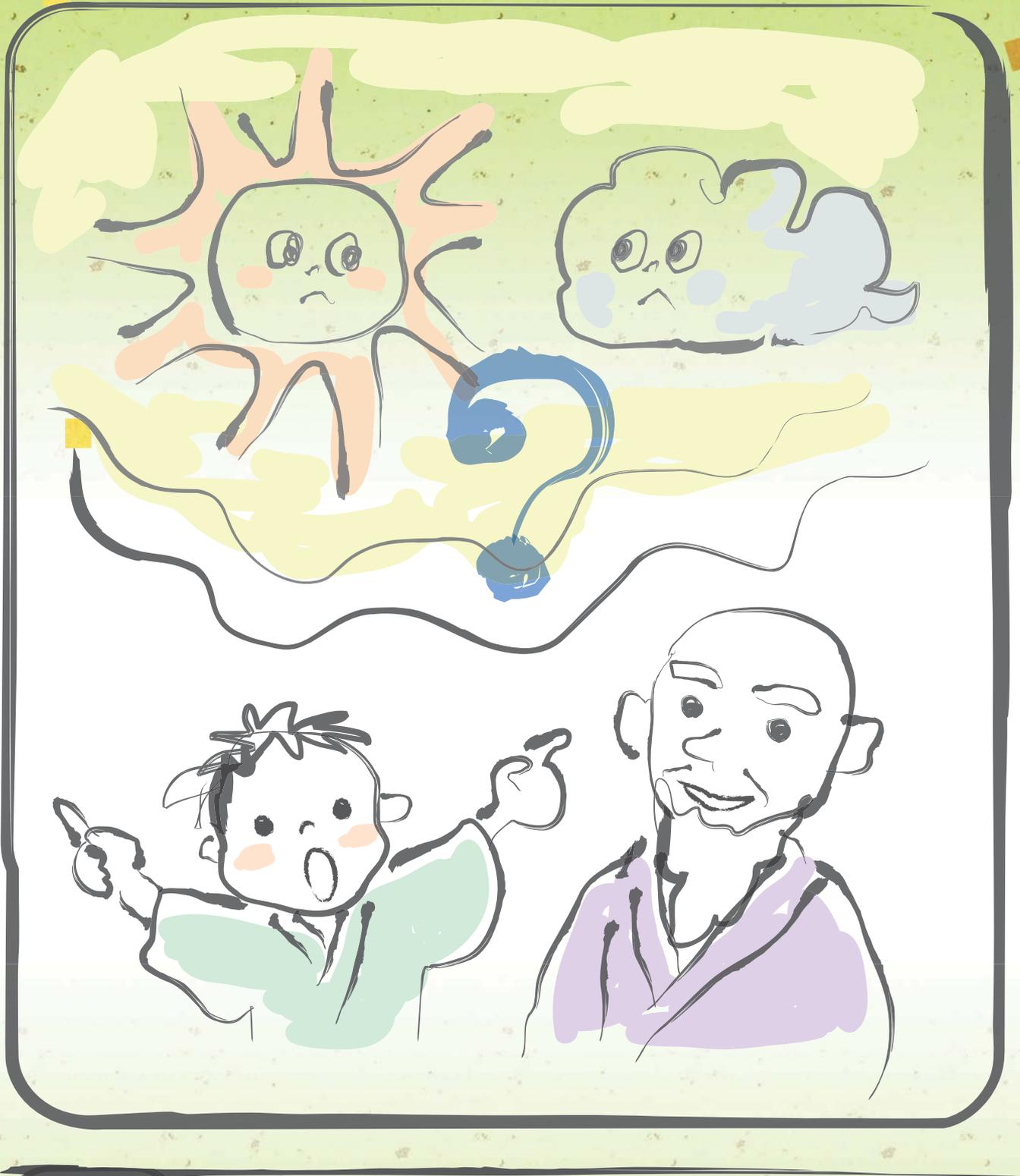
「そんなら和尚さん、わたしはその石屋になります」

「それみよ、やっぱり石屋が一番いいじやるがな」

そこで、三代目の孫も、親譲りの石屋になつたげな。とんほしかつちり。



【清武石の石堀】
石自体が柔らかで加工しやすく、時間が経つにつれ硬くなる特徴から、石堀、墓石などに利用されてきた。



注① げち・せつぎょう
・説教
注② げんが
天下・しょうぐん
・將軍

三年寝太郎

むかしむかし、知恵の多い一人息子があつたげな。家は貧乏して、難儀じやつたが、寺子屋にやつて勉強させちよつた。

こん難儀な家のとなりには、娘があつて、やはり寺子屋にやつていた。それかい、息子は、ぽおと寝こんで、なん日も寝ちよつたげな。

おつ母さんは、「おまえは寝ちよらんで、勉強せんか」と怒つたげな。

それでん息子は、寝てばかりあつて、年は十八、九になつた。そうして三年も寝ちよつて、年の晩になつて、

「いい考えがあるが」

と云つて、ごそごそ、もぞもぞして、元日の朝早よう、暗いうちに起き出して、鬼の面をかぶつて、となりの分限者の長者どん方の井戸のところさねいった。

そして、井戸のつるべにつかまって、井戸の中にかくれてあつた。

すると、長者どん方の下男が、年の始めの若水を汲みにき

たげな。すると、三年寝太郎どんは、鬼の面をかぶつて、

「年の始めの若男、よるずの宝をわれぞ汲みとる」となりの

三年寝太郎を、養子にとらねば、七代、四方、くるつづれ

とおらんだげな。

下男は、井戸の中から、鬼がそんげ言うので、

たまがつて、長者どんのところへとんでいった。

「ひじい声じやつたがあ、まこつちやぞ。赤鬼じやつたが」

「ええいそりや神の知らせかもしれん。うつせておくわけ

にやいかんわい、うつせておいて、七代、四方じゃ二十八代

じゃが」

長者どんは、そんげ言つて、

「井戸に行つてみるか」

と井戸端に行つてみた。

すると、井戸の水はきれいになつていた。鬼のすがたは見えん。それでん、長者は下男の言つた知らせが気になつて、

「やつぱりい、となりの寝太郎を養子にとらにやあ、神の知

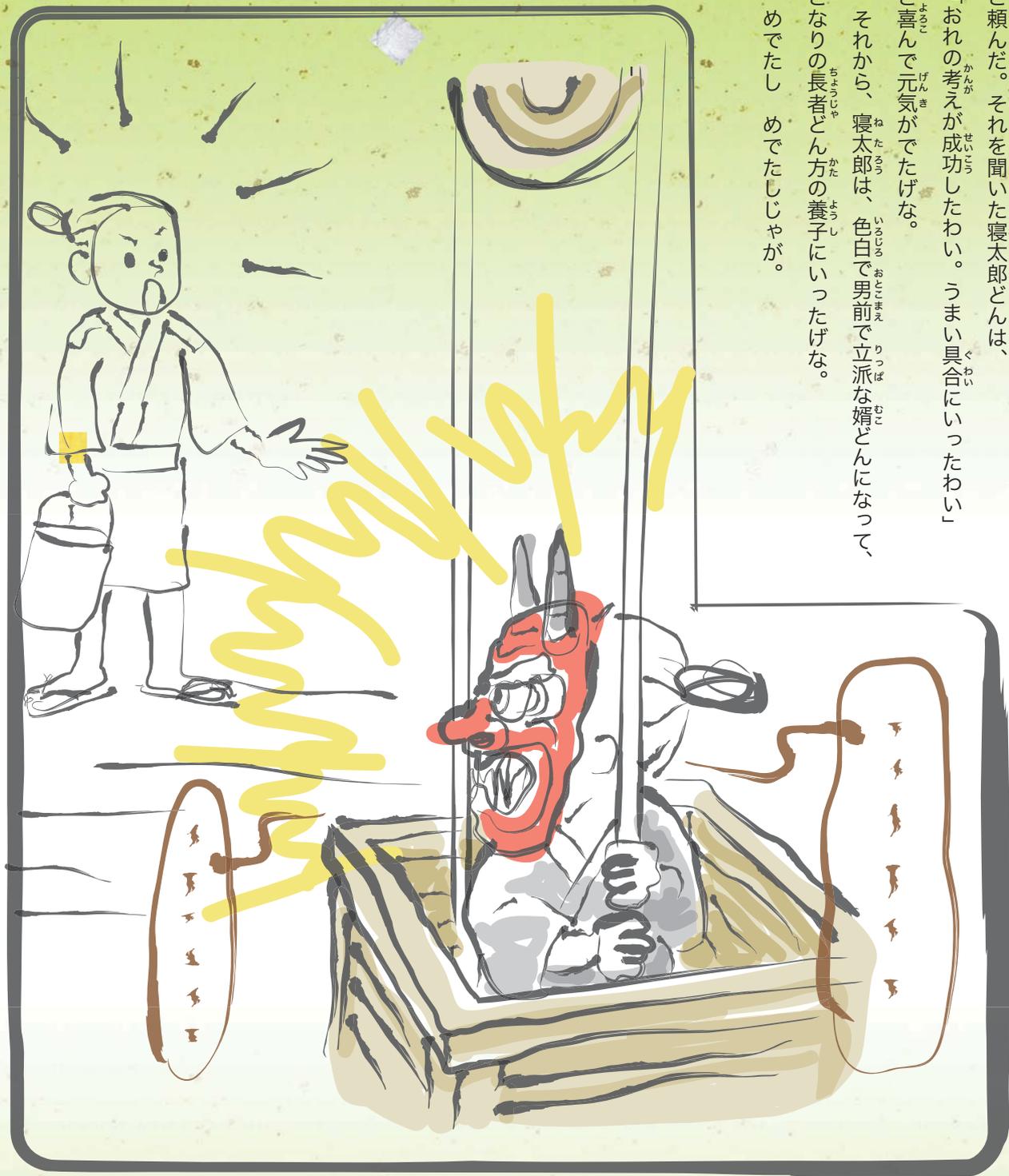
らせかもしれんぞ」

と云つて、となりに行つたげな。そして、



【うずら車】

鳥のうずらをモチーフにした「うずら車」。縁起物として古くから伝わる郷土玩具（おもちゃ）。



「寝太郎さんを養子にくるるわけにやいかんな」と頼んだ。それを聞いた寝太郎さんは、「おれの考えが成功したわい。うまい具合にいったわいと喜んで元気がでたげな。」

それから、寝太郎は、色白で男前で立派な婿ごんになって、となりの長者どん方の養子にいったげな。

めでたし めでたしじゃが。

- 注① 難儀・・・苦勞する
- 注② 年の晩・・・大晦日の夜
- 注③ 分限者・・・金持ち
- 注④ 下男・・・雇われて雑用をする男
- 注⑤ 若水・・・元日に初めてくむ水
- 注⑥ よろず・・・たくさん
- 注⑦ くる・・・蔵
- 注⑧ おらんだ・・・叫んだ
- 注⑨ ひじい・・・激しい
- 注⑩ うっせて・・・捨てて

すねこ太郎

すねこさんに、子が生まれた話じや。

むかしむかし、爺さん、婆さんがおったが、子どもはおらんかったげな。二人は、どうしてん子が欲しかった。それで、爺さん婆さんは、観音菩薩を一心に信仰して、願をかけたげな。

観音さん参りは、百段上がったて、百段下りて、石段がきつかった。それでん、毎日参っておった。二人は、夫婦喧嘩もせんて、口論もせんかった。それでん、子はなかなかできんかったげな。ある日、百段上がったて、百段下りる途中に転けて、すねをけがして、すねが痛くなつたげな。すると、すねこがだんだん膨れて、十月の神が受けとつて、すねこさんから、かわいい子が生まれたげな。

皮をひらいて頭が出て、
「あ、痛たたたあ、爺さん、すねこから子が生まれたがよ、痛ええ」

と云うと、右のすねこから、こんまい人形さんのような子ができた。

「こりやあ、観音さまの授かり子じや」

爺さん婆さんは、そんげ言うて喜んで、早速、その男の子

に、産湯をつかわせて、半紙の上で拭いてとりあげたげな。

眉は絵に描いたごつ、美しい顔だちの子じやった。

それから、婆さんは、重湯をつくつて、鳥の羽をむしつて、それで吞ませたげな。

三月四月たつても、すねこ太郎は大きくならんかったが、二年三年たつうちに、十五、十六くらいの大きな子のような言葉を使うごつなつた。

その頃は、一寸ほどのタカシロビキぐらいの大きさになつていて、

「爺さん、お椀の舟に乗つて、お箸の權で鬼が島に行く」と言つた。

それから、観音さまのお札を帆になるごつして、お椀の舟で風に吹かれて、川を下つていったげな。

さて、すねこ太郎が鬼が島につくと、赤鬼、青鬼が騒動して、

「人くさい、人くさい」
と言つたが、すねこ太郎は、鬼のサシハマの下にかくれちよつた。

それから、すねこ太郎は、鬼たちに弟子入りをして、鬼たちの好きなごつ、働いたげな。そして、鬼が島にある、打ち



【佐土原人形まんじゅうくい】

宮崎市佐土原町で作られている「まんじゅうくい」。もとは京都伏見から伝わった人形だが、佐土原では男の子から女の子に変化している。

注① 願をかける・願い事をする

注② 重湯・・・米を炊いたときの汁

注③ タカシロビキ・・・トノサマ

ガエル

注④ 權・・・舟を漕ぐための道具

注⑤ サシハマ・・・高下駄

注⑥ なして・・・なぜ

注⑦ おそえて・・・教えて

注⑧ 這いつくばつて・・・ひれ伏

して

注⑨ 分限者どん・・・金持ち

でん小槌をつこうてもろて、

「一人前に、五尺（約百五十一・五センチメートル）あまりの人間にしてくれんか」

「そりゃ、心やすいが、なして早よう言わんかったかよ」と言うて、きれいな男前の五尺の男にしてみろた。

それから、すねこ太郎は知恵があつたかい、鬼たちにいる仕事をおそえて、鬼たちも喜んでいたげな。

そして、鬼が島で三年がたった時、また鬼たちに願いで、「俺はすねこから生まれた子じやったが、里に帰って、爺さん婆さんを喜ばせにやららん」

と言うたら、鬼たちが舟をつくってくれたげな。

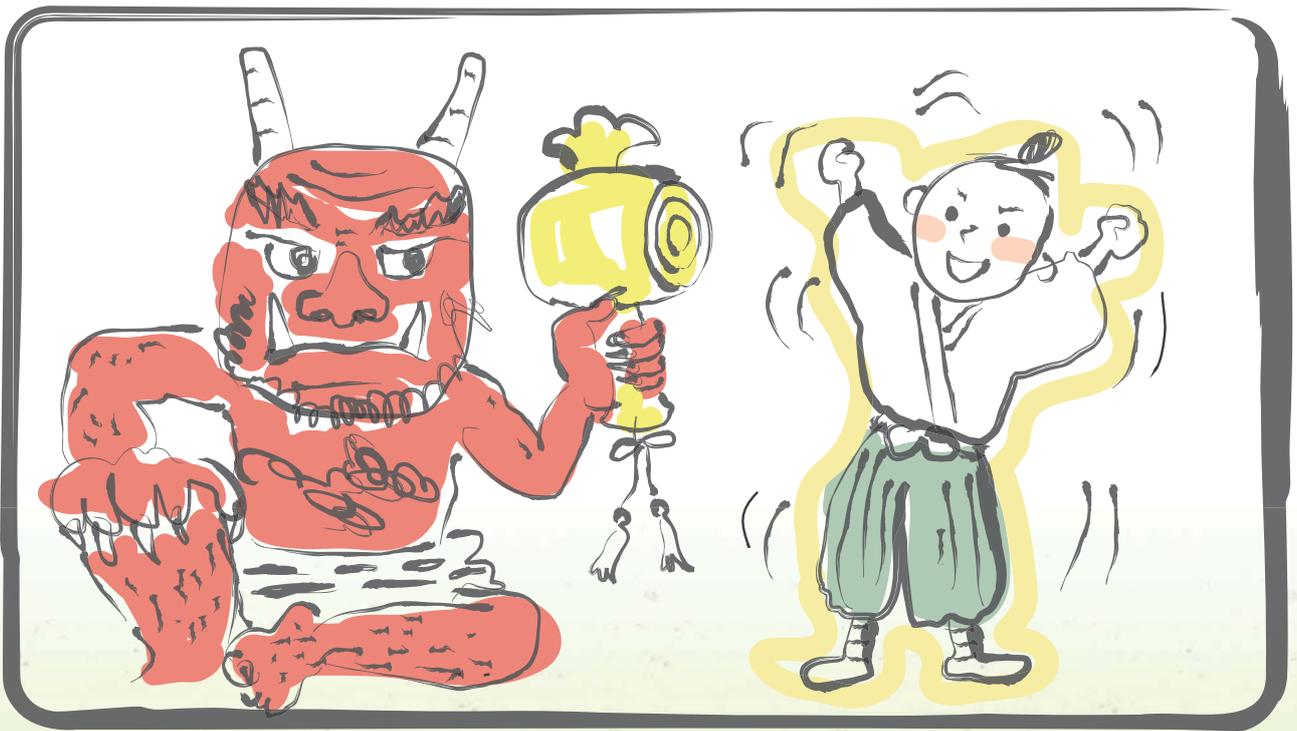
そして、その大きな船にのつて、観音さまのお札を持って、それかい鬼たちは、

「お前に、打ちでん小槌はくれるわい」と言うたかい、すねこ太郎は、青鬼、赤鬼たちに這いつくばって礼を言った。

それから、すねこ太郎は、爺さん婆さんところさね帰った。爺さん婆さんは喜んで、

「大きくなったわい。観音さまの授かり子は大きくなったわい」と言うて、打ちでん小槌で、いい物を出して分限者どんになつたげな。

とんぼしかつちり。



ばっちよ笠と地藏さん

むかしむかし、あるところに、信心深い婆さんが住んでいたげな。

ある日婆さんは、お寺参りの帰り道に、雨にぬれている地藏さんを見たげな。

「まあまあ、地藏さん。雨にひんぬれて冷たかろう」

婆さんはそう言って町へ出て、ばっちよ笠を買ってきた。

そうして、そのばっちよ笠を地藏さんにかぶせてやったげな。

その晩のこと。婆さんの家の戸を、トントンとたたく者があつた。地藏さんが戸を開けてみると、ばっちよ笠をかぶつた地藏さんが

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

と言いながら、山吹色のまぶしい小判を、ぼんぼん投げこんだげな。

「次つぎの晩ばんも、その次つぎの晩ばんも

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

「これ婆さん、笠賃よ」

と地藏さんが、小判をぼんぼん投げて帰つた。

婆さんは、たちまち分限者ぶんげんしゃになつたげな。

これを聞いた、となりの欲ばり婆さんが、雨の降るのを待っていた。

雨がぱらぱら降ってきたので、喜んだ婆さんは、町へ行って、笠を買ってきたげな。そうして、地藏さんにかぶせてやった。欲ばり婆さんは、毎晩、毎晩、

「これ婆さん、笠賃よ」

と、言ってくるのを待っていたげな。

しかし、地藏さんは訪ねて来ん。

ある晩のこと。

ようやく地藏さんがやってきたげな。

「これ婆さん、笠賃よ」

と言つて、地藏さんが投げこんでくれたのは、ちぎれた馬の草鞋わらじやつた。

かんかんに怒つた欲ばり婆さんは、

「こんげ、へえとも知れんもん、湯殿さねくべろ」

と言つた。

欲ばり婆さんは、湯殿の灰を裏の畑へ捨てた。すると、そこ

【ばっちよ笠】

竹を主材料とする。雨天時には雨よけに、夏場には日よけとして野外作業で活躍した。

注①

分限者・金持ち



【ばっちよ笠】

竹を主材料とする。雨天時には雨よけに、夏場には日よけとして野外作業で活躍した。

注② 湯殿・風呂

注③ くべろ・燃やせ

の灰の中はいなかから、ニヨキニヨキと竹の子たけこが一本いっぽん生はえてきたげな。

竹の子たけこは、ぐんぐんおお大きなくなった。

ぐんぐんの伸びて、天てんまで高たかくなったげな。

とうとう、天てんのお倉くらの便所べんじょに穴あなをあけてしまったげな。

たいへん、たいへん。欲よくばり婆ばあさんは、臭くさい臭くさいうんこを

かぶってしまった。

“人ひとんまねすっと、糞くそかぶり”

村むらの人ひとたちは、そうい言いって笑わらったげな。

ともすかつちり。



古屋のもり

なあに、むかしむかし、あつたげな。

人里離れた田舎の一軒家に、爺さん婆さんが住んでおった

げな。

晩御飯を食べながら、

「婆よ、こんげな晩に盗人に入られでもしたら、おじしてた

まらんね。婆は何んがこの世で、一番おじもんか」

爺さんが聞いた。婆さんが

「私か、私やあんまおじいかもんはねえけど、フルヤンモ

りだけがおいいわ、今晚辺り、来っとじゃねやるか」

と言ったげな。

ところがその晩、床の下には二人の牛盗人がしのんで、

二人の話に耳を傾けちよったげな。

「フルヤンモリとは、どんげ、おじい化け物じやるかい」

「今晚、婆を食いけるげな。こりや大事じゃ」

そんげ言うて、牛盗人が外へ出ると、人がめんかった。

そん人は、馬盗人じやったげな。二人が追うてくると思つて、

ひつたまげて逃げ出したげな。三丁ばかり走つたところに古

井戸があつて、そこへ馬盗人が落ちたげな。後から逃げて来

た牛盗人どんも、思わず飛びこんでしまったげな。

「爺さん、何か大きな音がしたが、牛どま、取られちよらん

かね」

婆さんがそんげ言うて、爺さんが外へ出て見やると、古

井戸のそばから、

「おおい助けてくり、誰か助けてくり」

と声がしたげな。

釣瓶を降ろして引つ張り上げてみると、盗人どもじやつた

げな。三人はびしょぬれで、走つて逃げていってしもうた。

爺さんは婆さんに、

「婆や、フルヤンモリとは、どんげな話か。フルヤンモリちゆ

うのは、どんげおじつか」

と聞いたげな。すると、

「雨が降ると、屋根がぼるから、古屋んもり、古屋の漏り、

何よりおじいいわね」

と言ったげな。

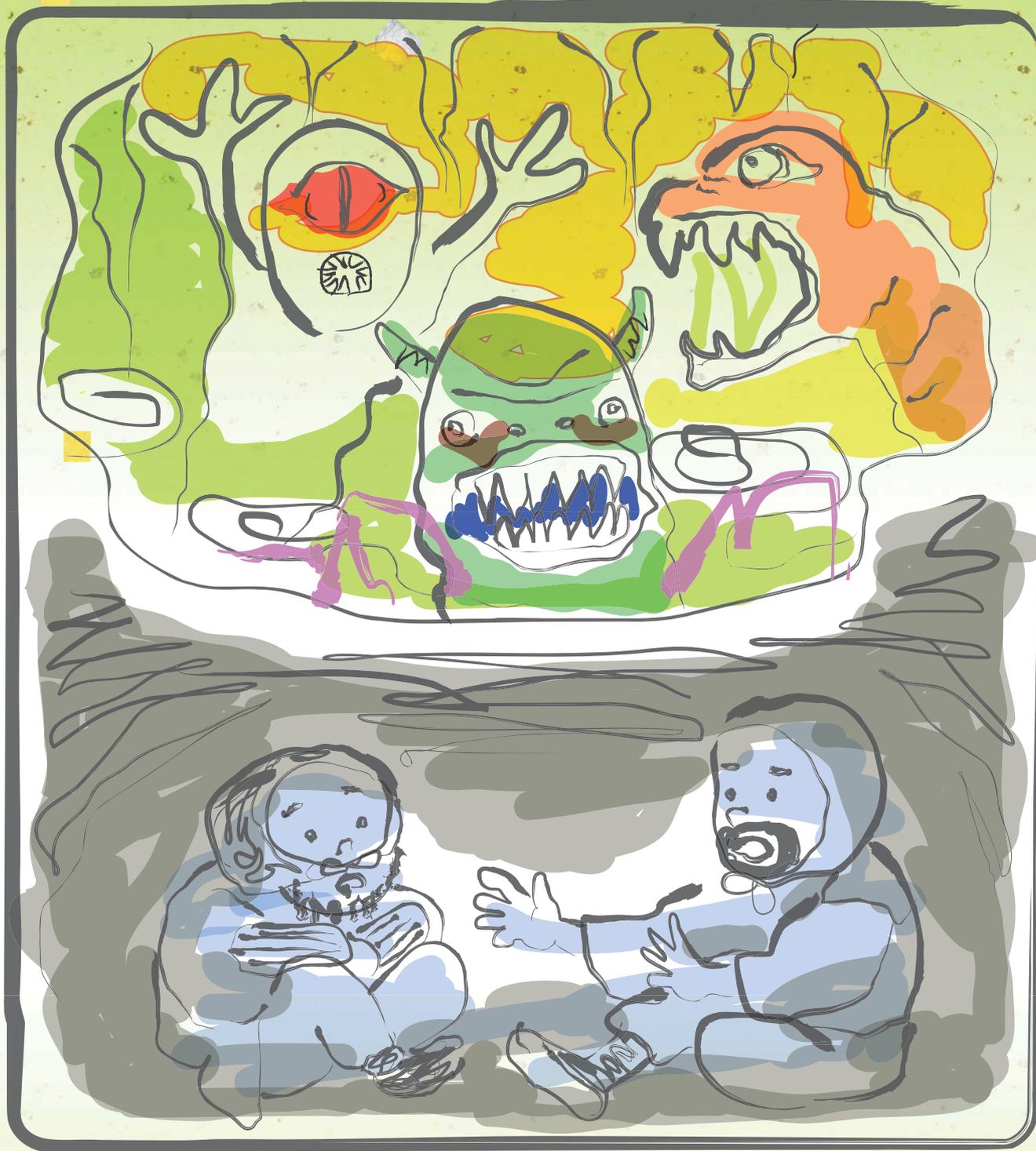
とんぼしかつちりばいばい。



【わらぶき民家】

屋根の素材がわらのため、屋根を切り立たせて、雨漏りを防止している。しかし、屋根の傷み具合で定期的に葺き替えをしなければならなかった。

- 注① おじ・・・恐ろしい
- 注② めんかかった・・・見えた
- 注③ ひつたまげて・・・驚いて
- 注④ 三丁・・・約三百メートル
- 注⑤ 釣瓶・・・井戸水を汲むために下ろす桶
- 注⑥ ぼる・・・漏る



尻ひりの嫁さん

むかしむかし、あるところに、働きの男がおって、嫁さんをもらって、仲よう暮らしておった。

ところが、嫁さんの顔色が、日一日と悪うなってきた。婿さんは心配して、

「お前、日に日に様子が悪うなるが、手遅れにならんうちに、医者どんに見てもらたら」

と言ったら、嫁さんは、
「どうもねえとじゃ」

と言いが、婿さんは、
「どうもねえはずはねえ、わけがあったら言ってみよ」

と言った。嫁さんは、もしもじして、
「わたしは、尻をこらえておると、体のぐつが悪うなるとじゃ」

と言ったげな。それで婿さんが、
「なんじゃ、尻なんと遠慮しちよるもんかあ、ひつたもんじゃ」

と言ったら、
「その、その尻がよういならん尻じゃかい」

と言った。
それで、そんげ大きな尻なら、ほくじゃというこつになつ

て、婿さんは戸袋を握りしめて、それから親爺どんは、馬屋の粉すり臼にとらまえておった。それから、おつ母さんは、馬屋の柱に抱きついちよった。

「よし、用意ができたかい、ひつてもいいが」

「それじゃ、ごめんさい」

嫁さんは、尻まくって、尻をひつたげな。そりや、大砲のごつふてえ尻で、家鳴り、地鳴りがしたげな。

戸袋をとらまえちよった婿さんは、凧が舞うごつ、山のヤブの中に飛ばされた。親爺さんは、粉すり臼をとらまえたま

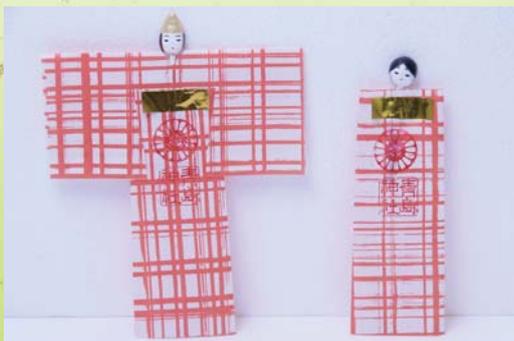
ま、コロコロコロ、こかされてしもうた。おつ母さんは、柱がうなうなえて、本物のなえのごつおじかつたげな。

「やあ、こりや、ほくなこつちや。こんげな尻をひつてもるたら生命にかかわる。すまんが暇をとつてくれんか」

とうとう、尻ひり嫁さんは、暇が出たげな。

夏のぬくい頃のことじゃった。嫁さんは、しおれてしもうて、里の家にもどりよった。すると、往還の背戸で、馬喰ど

んがナシの木を見上げて、よくうていた。馬喰どんは、
「ああ、のどが渴いた、ナシがかみたいもんじゃあ」



【青島びな】

「願かけびな」といわれ、縁結び、夫婦円満、安産などの願をかけ神前に供えるところがある」とされている。

- 注① 体のぐつ・・・体の具合
- 注② よういならん・・・簡単でない
- 注③ ほくじゃ・・・大変
- 注④ 戸袋・・・雨戸を収納するところ
- 注⑤ ふてえ・・・大きな
- 注⑥ こかされて・・・転がされて
- 注⑦ えて・・・ゆれて
- 注⑧ えて・・・地震

と思うて、石を投げて、ナシを落とすごつしていたげな。石はなかなか当たらんかった。

そこへ、嫁さんが通りかかった。馬喰どんはナシをかみた

いばかりで、まだ石を投げていたげな。それで、嫁さんが「あんた、そんげ、ナシがかみたければ、私が尻であやしてあぐか」と言った。すると、馬喰どんたちは腹かいて、

「なんじゃ、男が何人もかかって落ちてんもんを、尻であやすとは横着なもんじゃ」

嫁さんは、それでん、にこにこ笑うて、「なあに、こんげなこつ、ぞうさがあるか」と言ったかい、馬喰どんが本気になつて、

「よおし、お前が、まこつナシをあやすなら、馬一頭くれるわい」と言った。そこで、嫁さんは、尻の上に、三四こ、石をせて、尻をひったげな。

すると、石がボンと、ナシの木にとんで、ナシの実がパラパラあえてきたげな。

馬喰どんはたまげて、ナシをひろうて、食べたげな。それかい嫁さんが、

「賭できめた馬を一頭もらうかい」と言ったら、馬喰どんは、馬があたれして、くれんかったげな。

それから嫁さんが腹かいて、

「あんたたちを吸いつけてくれる」と言ったら、尻の穴さね、すうすう風がなって、馬喰どんの頭が、尻の穴へ吸いつけられてしもた。

馬喰どんたちは、頭を吸いつかれて、ばたばた足もがし

ていたげなが、今度は馬の口元を切られて、「出すか、出さんな。くれるか、くれんな」と言った。馬喰どんは苦しがつて、

「もう、かんにん、かんにん」と謝ったげな。それで、嫁さんは、馬喰どんの頭を、尻の穴から放してやった。

そうして、もううた馬を、婿どん方へ引いて行って、「こん馬は、あんたにくれるわ」と言うて、里へ戻りかけたげな。すると、婿どんの家では、

「大きな尻が金をもたらするなら、また家におつてくれんか」と頼んで、里戻りの暇は取り止めになったげな。

また、夫婦仲よう、暮らしたげな。それかい、嫁の尻をする「尻屋」を作るようになったげな。

これが部屋が始まりじゃった。ともうすかつちん。



注⑨ おじかった・・・恐ろしかった

注⑩ 暇が出る・・・離縁される

注⑪ しておれて・・・元気をなくして

注⑫ 往還・・・人が行き来する道

注⑬ 背戸・・・裏手

注⑭ 馬喰どん・・・牛馬の売買をする人

注⑮ よくう・・・休む

注⑯ かみたい・・・食べたい

注⑰ そんげ・・・そんなに

注⑱ あやして・・・落として

注⑲ 腹かいて・・・腹を立てて

注⑳ ぞうさがあるか・・・わけないさ

注㉑ まこつ・・・本当に

注㉒ あたれして・・・惜しくて

注㉓ 尻の穴・・・お尻の穴

食わず女房

むかしむかし、あるところに若い桶屋がいたげな。

桶屋は働き者じゃったが、ちっと、けちん坊で、

「俺が嫁女は、飯を食わん奴がほしい。自分せけ食うちよければ銭も残るかいな」

と思うちよった。

すると、朝からトントントン桶を叩いていると、

「ごめんください。ごめんください」

という女の声がしたげな。

桶屋が表に出てみると、もぞろしか女が立っていた。

「あんだ、何か用がありますか」

「いやいや、私はあなたの嫁さんになりたいと思ちよるが、どうか貰うてくださりよ」

桶屋は女が別嬪じゃもんじゃから、目をパチパチしていた

げなが、

「俺が嫁女には、飯を食わんとじゃねえと、困るがよ」

「心配しなさんな。わたしは飯を食わんともいい女じゃかい、

嫁さんに貰うてくださり」

と言った。そこで桶屋は、そん女を嫁女にしたげな。

桶屋は別嬪の嫁女が来たかい大喜びで、トントントンタン

タン、トントントンタンタンと、朝から晩までよう働いて

いたげなが、五日十日過ぎるうちに米がどさどさ減つていくとに、たまげた。

飯を食うとは桶屋一人じゃかい、一月ある米が十日で無え

なるはずがおかしいと思うたが、また米一俵を買って来たところ、それも十日で無えなつてしもたげな。

そこで桶屋は、ある日、

「きようは忙しいかい、晩まで戻らんわい」

と言つて、外へ出たが、まあいっぺん家さね帰って来て、裏

の屋根から天井さね登つて隠れていた。

すると嫁女は何も知らずに、米俵ごと抱えて井戸端でザク

ザク洗いだしたげな。それから大けな釜で米を炊きはじめ、

飯が煮えると大けな握り飯を作つて戸板に並べたげな。

それから今度は、大けな鍋で味噌汁をぎょうさん炊いて、

味噌汁ができる鏡の前で頭の髪をさばき始めた。

すると、頭の上に真赤な蛇のごつした口があつて、それに

大けな握り飯をバクバク投げこんで、味噌汁をザブザブ流し



【萱蒲】

葉の形が刀に似ていることや、邪気を祓うような爽やかな香りを発することから、男子に縁起のよい植物とされ端午の節句にも用いられる。

- 注① もぞろしか・・・かわいらしい
 注② 別嬪・・・美しい人
 注③ たまげた・・・驚いた
 注④ おじなつて・・・怖くなつて
 注⑤ おらんだ・・・叫んだ
 注⑥ ひんだれて・・・疲れて
 注⑦ 萱蒲・・・アヤメ科の多年草

こんだけな。見ていた桶屋は、おじなって足がガタガタ震えて、天井裏で音をたてたげなかい、嫁女が怒って、

「これ、お前は、私を見たな」

とおらんだけな。その嫁女の顔は鬼婆じやった。目がキラキラと光って、口が耳まで裂けちよった。

桶屋は手を合わせて、

「お許しください、お許しください」

と言った。

「許すことはならん。お前は大きな桶を作れ。その桶さねお前を入れてくるる」

と言って、無理やりに大きな桶を作らせて、その中に男を落とし込んだげな。

そうして鬼婆は男の入った桶を頭の上に乗せると、山の方に歩いて行った。桶屋は逃げようと思つたが、桶が大きいのでどうしもならん。鬼婆はだんだん山奥さね入つて、だんだん日も暮れはじめた。それから鬼婆は疲れたのか、一時立ち止まったげな。

ちよつどそんな時、桶屋の頭の上に松の木の枝が目にかつた。桶屋はパツとそんな松の枝にとびついた。鬼婆はそれも知らんとずんずん歩いて行つたげなかい、桶屋は急いで木から降りると、町さね向けて逃げたげな。

石や木の根にかかつて、こけたり倒れたりしながら、どんどん走つて逃げた。すると向こうから、

「おい待て、おい待て」

と言つて、鬼婆が追つて来たげな。

桶屋は足がふらふらで、もうよう走らんごつ、ひんだれて逃げた。それからあわてた桶屋は、近くに生えていた菖蒲の中に隠れた。やがて鬼婆がやつて来て、

「人臭いぞ、桶屋のにおいがするぞ。そこに隠れちよるな」

と言つて、菖蒲の株のそばに近づいて来た。

桶屋はもう助からないと思つて、

「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

と目をつぶっていたげなが、鬼婆の両方の目に菖蒲の剣のよな穂先が刺さつてもした。鬼婆は目を押さえて、苦しみな

がら山の奥さね逃げて行った。

菖蒲のおかげで危ない生命が助かつた桶屋は、五月になると鬼婆が来ないように、家の軒に菖蒲をかざるごつ、なつたげな。

ともうすかつちり。



そばの茎なせ赤い

むかしむかし、あつたげな。

あるところに、父親と三人の娘が住んでいたげな。ある日のこと。父親が一人の女を連れちきて、

「新しいおっ母さんじゃ」

と娘たちに言ったげな。

それは眼がキラキラ光る、口のひどく大きな女じやつた。

父親のおらんある晩のこと。新しいおっ母さんと、三人の娘は枕を並べて床についた。真夜中ごろ、一番上の姉が、ふと眼を覚ましてみると、おっ母さんの寝ている辺りから、

「プチン、プチン、プチン」

と何やら食べる音がするげな。そこで姉娘が、

「おっ母さん、何食べなつと、わちにも一つくだい」

と言った。するとおっ母さんは、

「漬けもんじゃが、かむとなら、かんでみれ。ほらくるるが」と何かを投げてくれたげな。口のそばに持っていくと、ぷんと、生臭いにおいがした。よおと見ると、それは漬けもんじゃ

ねかつたげな。

きつと、おっ母さんに抱かれて寝た末娘を食べたつちやね

えかと思うと、体が震えてきたげな。姉娘は、そつと中の娘をゆり起こして、

「おっ母さん、便所に行つてきてもいいかあ」

とたずねたげな。すると、おっ母さんは、

「便所に行くとなら、こんひもに結んでいけ」

と言いながら、二人の娘を腰ひもに結びつけて、自分がそん端を握つちよつたげな。賢い姉娘は、中の妹と自分の腰ひも

をといて、そん端を便所の柱に縛りつけた。二人は、手に手を取つて、いっさんに逃げ出した。

新しいおっ母さんは、二人の便所があまり長いので、ひもをたぐりよせてみたげな。いくら引っぱつても、びくともせ

んかい、庭にとび出してみると、明るい月夜の白いそばの花を押し分けて、二人の姉妹が逃げていくのが見えたげな。

怒つたおっ母さんは、鬼婆の正体をあらわして、

「待てえ、待たんか、こらつ」

と叫びながら、そばの花をけ散らして追つてきた。

二人の娘は、たちまち追いつかれそうになって、逃げ場にならなかつたもんじゃから、畑のすみの大きなナシの木によじ登つ



【そば畑】

そばはあまり栄養のない畑でも生育し、種まきをしてから二、三ヶ月程度で収穫できる。花が散つた後、残つた実はそば粉にして麵などの食用にされる。

注① 床につく・・・寝る

注② わち・・・私

注③ くるる・・・あげる

注④ いっさんに・・・いちもくさんに

注⑤ 一升・・・約一八リットル

注⑥ もどかして・・・からかつて

注⑦ ひつたまがる・・・驚く、びつくりする

た。鬼婆は木の下にきて一息ついて、どんげして、こん木に登ろうかと考えた。そこで鬼婆は、

「こら、お前たちは、どんげして、こん木に登ったつか」

と木の上の娘たちに聞いたがな。これを聞いた姉娘は、

「油屋から油を一升買って来て、頭からかぶつたらいいが」

と教えた。そこで、鬼婆は、そんな通りにやったつちやけどよ、

ツルンツルン滑ってとても登れそうにない。

「こら、お前たちは、よくもこのおっ母さんをもどかしてく

れたな。本当のことを言わんときかんぞ」

鬼婆はナシの木の下で、大きな口を開けてほえたてた。そ

ん凄まじさにひったまがった中の娘は、思わず、

「斧で木の幹さね、足がかりを刻んで登るといいが」

と言ってしまったがな。

鬼婆はさっそく、斧を担いで来て、足がかりを刻んでは、

ずんずん登ってきた。姉妹は、ゆらゆら揺れる、高い梢の辺

りまで登ったが、もうこれから先は逃げるところがねえ。

よし登って来た鬼婆の吐く息は、すぐ下に聞こえて、今にも

も鬼婆の黒い爪が姉妹の足をひっかけようとしちよる。姉妹

は夜空に輝く星を見上げてよ、

「神さま、神さま、助けてください」

と最後の頼みを祈ったがな。

するとそんな時、空の上から、するすると大きな籠が降りて

きたがな。二人がすばやくそれに乗りこむが早いか、そんな籠

はスルスルと天に上って見えなくなった。

鬼婆は歯ぎしりを鳴らして悔しがり、また姉妹のように手を合わせて神さまに祈った。

すると、まもなく天から一つの籠が降りてきた。鬼婆は喜

んで、籠に乗りこんだ。籠は勢よく上がり始めて、みるみる

うちにそば畑も山里も小さくなった。急に、こん籠の綱がプ

ツンと切れてしまったがな。

籠はクルクルと回って落ち、鬼婆は悲鳴をあげて、白い花

ざかりのそば畑の中へたたきつけられた。鬼婆の血はしぶき

をあげてそばの畑へふりかかり、それから、そばの茎は赤く

なったがな。あん姉妹はちゅうと、天にのぼって、双子星に

なったがな。

とんぼしかつちり。





むかしむかし、悪ん坊の子どもがおつたげな。子どもは大きくなって、親に勘当されて傘屋の丁稚になったげな。

ある日のこと。傘屋の主人から、

「お前は、川に傘干しに行け」

と言われて、丁稚は傘を一本かかえて出かけようとした。すると主人が、

「一本がなんじや、両手に一本ずつ持って二本干して来い」

と言われたげな。

丁稚が川に行つて傘を二本ひろげて持っていたら、急に大風が吹いてきて体が空に吹きあげられたげな。

「これで傘を放したら、ぼくなこつ。傘まかせ風まかせに、しがみついておろ」

丁稚は目をつぶったまま、しばらく空を吹きとばされていったげな。

行くところまで行つて、まなこを開いてみたら、何か黒いところへ体が乗っている。ずっと見回していると、向こうの方にキラキラ光るものが目にかかったげな。そこでその光るところに寄つてみたら、顔も体も目も大きい、その上太鼓を

何十と体のぐるりにおいとる者がおる。丁稚は恐る恐る、

「自分は親から勘当を受けて、傘屋に弟子いったが、風のために吹きあげられてやって来たが、一体ここは何というところか」

と聞いたげな。すると、その人が言われるのにや、

「ここは黒雲の上、わしは雷だ。もうここに来れば家に戻ることはできんがな」

「そんなら雷どん、私を何なりと使うてくださりよ」

「よし、それじゃこの車引きになるがいい」

そこで丁稚は、雷どんの車引きになったげな。それから雷どんは、自分が目をくるりと返した時にや、おまえは目をつぶれ。

あけちよると、目が焼きつぶるど。それから、車は黒雲の上だけ、こかさにやいかん」

と言った。丁稚は、雷どんの車を、引き返し引き返し、黒雲の上をひいていた。端までくると落ちんように、うまく車を廻さねばならん。

ある時のこと、雷どんがパツと、目を返して光った。ちょうど黒雲のはずれを引いていた丁稚は、あわてて目をつぶったひょうしに、黒雲の上から落ちて何もわからんごつなってしもたげな。



【のぼり猿】

延岡地方に古くから伝わるきょうとがんぐはなしようがはた郷土玩具。花菖蒲の旗がたなびくなか、猿が上へ下へと動く様子が可愛いらしい。延岡では端午の節句に鯉のぼりと一緒に並べて祝う風習がある。

注① 勘当・・・親が子との縁を切ること。

注② 丁稚・・・職人や商人の家で、その主人のために尽くし、雑用の仕事をすること。

注③ ぼくなこつ・・・大変なこと

注④ こかさにや・・・転がす

注⑤ 威勢のいい・・・元気のいい

しばらくして気がついてみたら、立派な家や御殿が並んでいた。
「ここは何処じやるか」

人に聞こうにも、だれも通りやせん。ひっそりした家の戸口、戸口に、魚の切身が糸につるしてかけてあったげな。

「ごめんください。ごめんください」

だれも返事をしてくれん。丁稚はずっと奥の町の外れまで歩いて行って、大きな御殿の前で声をかけた。

「ごめんください。ごめんください」

すると奥の方から一人の美しい女が出てきたので、丁稚は今まで自分の身の上話をして聞かせたげな。その女の言つものには、
「ここはとても人間なんか来るところじゃありません。竜宮というところですが」

「仕方がありません。どうか私を使うてください」

「それでは、あなたはこの町外れにある井戸から、毎日水汲みをしてください。いくらひもじくとも食べたくとも、途中で下がっている魚の切身を食べてはいけません」

そこで丁稚は言われた通り、毎え日竜宮の町外れから井戸水を汲んで運んだげな。ところが、

「食べちゃいかん、食べちゃいかん」

と考えながらも、ある日のこと、とうとう魚の切身をパクツと口に入れてしまった。

さあ大変、パツと丁稚は釣りあげられてしまった。その時はまた何も覚えんごつなつたげな。

しばらくして気がつくつと、

「えんや、えんや、えんや」

と威勢のいい声が聞こえてきた。

丁稚は漁師どんの網にかかっていたんじや。港の入り口になった時、漁師どんは、

「こりや大事つじや。人魚が網にかかちよるぞ。死なしちゃならん、死なしちゃならん」

とおらんだ。ようやく網から引きあげた漁師どんたちは、鉤をくわえた丁稚の口を開けようとした。だが丁稚は口を食いしばちよつて、なかなか鉤がとれん。

そこで漁師どんが、キセルを持って丁稚の口をこじ開けて鉤を外したげな。

ところがその時開けた丁稚の口には、歯が一本もない。これが歯なし(話)じゃげな。とんほしかつちりばいばい。



注⑥ おらんだ・・・叫んだ

注⑦ 鉤・・・先の曲がった金属製の器具、ここでは釣り針のこと

注⑧ キセル・・・タバコを吸う道具

跡江の半びどん

跡江の半びどんは、えらく頓知のきく男だったげな。子どもは五人、屋敷と三反ばかりの畑を持っていた。その畑では、嫁女が唐芋を作っておった。半びどんは、分限者どん方へ毎え日、日稼ぎに通っていたげな。

ある雨の日に、半びどんは北の代官所に呼び出されたげな。雨のどしやがしや降る日じゃった。代官は半びが出向くと、「よう半び、今日は雨の日のつれづれに、何か話して聞かし」と言った。そこで半びどんは、

「わしがこへ来るあいさに、カラ蛇がビキを呑じよったかい、『放せ、放せ』というたが、カラ蛇やるは、『呑まにや放さぬ』と言いやしたげ」

と言った。代官は笑うて、すぐに盃を出して酒の用意をしたところ、今度は半びどんがシクシク泣きながら言うたげな。

「うちの先祖の爺が、こんめえ盃を鼻の穴におしくで死にやしたがよ」

そこで代官も小さな盃をかえて、湯飲み茶碗を出した。それから半びどんは、

「わたしが米良の小豆坂を通りよつたら天狗が出てきて、

『半び相撲とろう。とりやな通さん』と言ったかい、天狗の鼻にしがみついたがよ。すると天狗が『半び放せ、半び放せ』と言った

と話し始めた。これはこんなひどい雨の日に、半びを呼び出した代官への面当てじゃった。

代官の鼻は、天狗鼻とよう似ちよつたげなよ。

これも、半びどんの話。

半びどんが佐土原へ行く時、広原で稲を刈っている娘がおつた。

半びどんは稲の出来がいいので、

「御御、御御、稲がぎようさんできて、うれしかるがな」と話しかけたところ、その御御は、

「田は豊作で出来たけど、大根が不作で困つたもんよ」と返事をしたげな。

半びどんは、その意味が判じ得ず、家に戻って力かどんに聞くと、



【半びどんの墓】

跡江の農民の息子として生まれた半びどんは、宮崎の頓知者として有名である。農民の代弁者として、ユーモアを交えながら役人と渡り合った。

- 注① 頓知・・・知恵
- 注② 三反・・・約三十アール
- 注③ 唐芋・・・さつまいも
- 注④ 分限者どん・・・金持ち
- 注⑤ 代官所・・・地方の役人がいた役所
- 注⑥ つれづれに・・・退屈のぎに
- 注⑦ あいさ・・・途中
- 注⑧ ビキ・・・カエル



「それがわからんかよ。大根が不作じゃ、大根葉を干して馬
 に与える干し葉もねえ、と言うとじゃが」
 と笑った。なるほど、干し葉を、稲の干し場にひっかけたこ
 とじゃったげな。
 半びどん、一本取られてしまったげな。珍しく、半びどん
 が負けた話じゃげな。

- 注⑨ おしくて・・・押し込んで
- 注⑩ 面当て・・・あてつけ
- 注⑪ 御御・・・女性のこと
- 注⑫ ぎょうさん・・・たくさん
- 注⑬ 判じ得ず・・・分からず

万太郎狐

むかしむかし、本庄の森永に、万太郎という化け狐がおったげな。

ある雨の降る日じやった。若者が、作小屋によるうて、

炭俵の縄ないをしておった。すると、向こうから万太郎狐が見えたげな。若者は、

「誰か、万太郎狐のそばさね行って見らんか」

と言ったら、

「銭くれれば行くが」

と言った。

「いくらくれれば行くか」

「五銭くれれば行くが」

「よし、後から五銭くるわあ、誰か行ってみよ」

それから、五人おった若者のうち、ぼっけもんがおって、

「俺が、行ってみるが」

と言ったら、みんなが、

「ひん戻ったら、いかんぞ」

と言った。すると、

「せわなこつはねえ。戻るもんや」

と言つて、草原のヤブさね出かけたげな。

雨は、パラン、パラン降って、

「俺や、どこさね行きよつか。どこに万太郎さんがおつか」

ぼっけもんは、そんげ言つて、うるうるしちよったげな。

すると、ヤブのところで万太郎狐がおって、

「ごらごら、お前は狐がおじいこつはねえつか」

と言った。

「なあに、おじこつがあるか。お前んそばに遊びに来たつちやが」

「ええ、そうか。そりや、おもしろい。早う支度するかい、

待ちよれよ」

万太郎狐はそんげ言つて、女中さんに化けたげな。みごち

い別嬪の女中で、その女中が、ぼっけもんと手つねえで、

「さあ、行こや。本庄の旅人宿に行こや」

と言つて、本庄の町さね行つた。旅人宿へ行くと、旅人宿の主人が、

「上がんなれ。上がんなれ」

と言つた。きれいな女中じゃもんで、主人が目をつけて、

「うちで働きなされ。雇うてあげるが」

と言つて、ぼっけもんと、相談したげな。なかなか値が折り

あわんで、ようやく三両ばかりに決まつたげな。



【本庄森永の風景】



注① そばさね・・・そばに、近くに
注② ぼっけもん・・・間抜けな人

それかい、ぼっけもんは、三両を受けとって、万太郎狐の女中は、「あんたは、銭を持って家に帰んなされ」と言うて、別れたげな。

それかい、若者たちは、ぼっけもんがおらんごつなって、鉦、太鼓を叩いて探しちよった。

「本庄の方さね、いい女中と手つねえで、行きよったが」
 そんげ教えられたげなかい、若者がどんどん本庄の方さね、歩んで行きよったげな。すると、ぼっけもんが、ふんどしに銭を包んで戻りよった。

「わら、どこさね行つちよったか」

ぼっけもんは、うんともすうとも言わんで、家に戻って、ふんどしの銭を出したげな。銭は三両あった。みんなたまがって、

「えらい銭もうけじゃが。ぼっけもんでん、万太郎狐にやされんで、銭を儲けたが。いくら働いてん、三両もたまるもんじゃねえ」

と言うたげな。

それかい、万太郎狐は、旅人宿から、ひん逃げて戻っていいたげな。

川中さまという川中神社のそばを通りよった男どんが、草原に猪の子が、五匹かたまっておっとを見たげな。そいで、男どんは羽織をひんぬいて、猪の子にうち被せた。

何回も羽織をうち被せて、せわなくに押しつけて、猪の子がたったの一匹もとれん。羽織のたもとさね入って、一匹もとれん。



そこ辺りを、きよるきよる見ると、トクロビキ（ガマ）が一匹おった。それかい、田の中に万太郎狐がとんで逃げたげな。それかい、山師どんが油げと、大豆飯の弁当を食いよった。すると、よう肥えちよる、めんどりが一羽やってきたげな。そいで山師どんが、米粒を投げてやると、どんどん拾うて食うて、こっちへ来るげな。そいで山師どんは、着物をうち被せたら、熊蜂がガシヤガシヤ刺した。そして山師どんが、熊蜂の巣を捕まえると、何にも見えんかった。始めはシロニワトリに化けて、それかい熊蜂に化けたんじや。

万太郎狐は、なかなかよう化ける狐じやったげな。

注③ せわなこつはねえ・・・心配
 しなくてもいい
 注④ おじい・・・怖い
 注⑤ 別嬪・・・美しい
 注⑥ 手つねえで・・・手をつないで
 注⑦ たまがって・・・おどろいて
 注⑧ せわなく・・・きちんと

大人弥五郎どん

むかしむかし、弥五郎どんという、それは大けな人がおりやっただけな。

尾鈴山に腰かけて、太平洋で面洗やっただというぐらじゃ。そんな時、左足は延岡に、右足は日南に届いたとか、太平洋を七股で歩きやるげなとかいう話じゃ。

弥五郎どんが歩くと、足あとが谷になったり、池にったりしたげな。

大雨で川の土手がくえて困ったちよつたら、弥五郎どんが山のちよつぺんにあつた石を持ってきて、そこに落としてはめてくりやっただげな。

村の人たちは喜んで、「がまがましい顔じゃけど、弥五郎どんは優しいなあ」と、語り合やっただもんじゃ。

村の人たちは、弥五郎どんを頼りに思つちよつたが、勝手ごろの時もあつて、大けな岩で川の水をせき止められてもたこつもあつただげな。そして、

「わらじを百足作つてくるれば、岩を取りのけてやる」と言やっただげな。それから、今でも、無理なわがままばつ

かり言うこつを『わらじ百足』と言うとよ。

「鰐塚山に登つて、雷さまをかきまぜて、鳴らんごつしてみする」

と言やつた時には、弥五郎どんの大仕事に慣れちよりやる村の人たちも、たまがつてしもた。

弥五郎どんの話は、鹿児島の方にもあるげな。霧島山をサシ棒で担ぎやつたとか、山を削りつつて

錦江湾を埋め立つごつしやつたとかいうことじゃ。そんな時にこぼれた土を『弥五郎どんの一もつこ』と言うて、畑の中に、ちよつとした丘になつちよるげな。

弥五郎どん祭り、というのもあるわな。昔話に出てくる弥五郎どんよりは、だいぶん小めつちやが、お祭りの行列の一番前を、のつしのつしと歩きよりやる。

鹿児島県の岩川八幡神社と、宮崎県日南市の田之上八幡神社、都城市の的野八幡神社の秋祭り、がまがましいお面の人形に着物を着せて、ぎょうさんの人たちが、押して歩きやつとよ。

三メートルから五メートルもある人形は、電線が邪魔

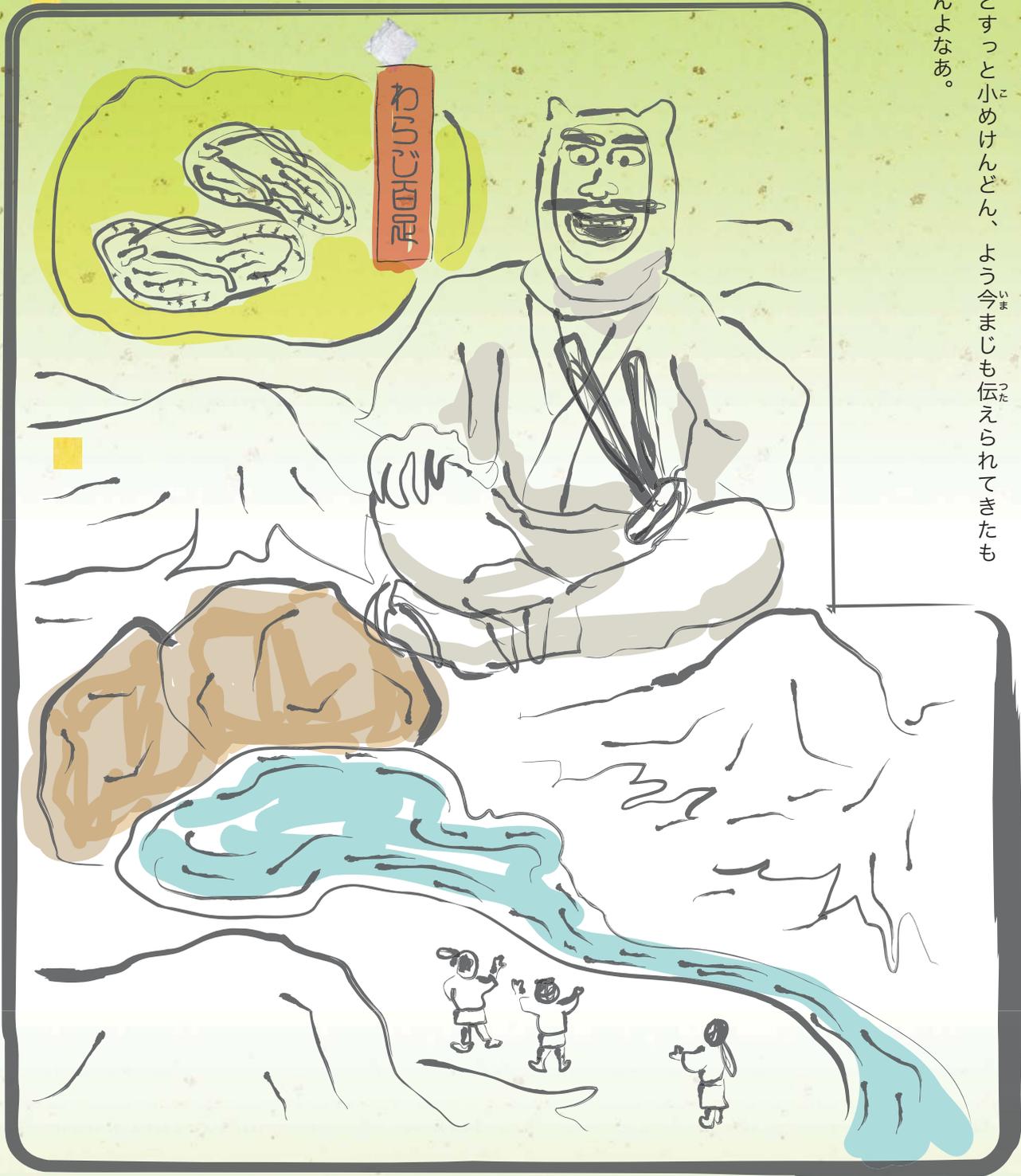


【山之口弥五郎どん人形】

弥五郎どん三兄弟説があり、長男・やまのくち、弥五郎どん（都城市）、山之口の弥五郎どん（鹿児島県次男・大隅の弥五郎どん（鹿児島県曾於市）、三男・日南の弥五郎どん（日南市）と伝えられている。十一月には三体を祀る各神社で「弥五郎どん祭り」が催され、巨大な弥五郎どん人形が御神行列で町をねり歩く。

題字 大人と書いて「おおひと」と読む。

- 注① くえて・・・壊れて
- 注② がまがましい・・・恐ろしい
- 注③ たまがつて・・・驚いて
- 注④ 小めつ・・・小さい
- 注⑤ ぎょうさん・・・たくさん
- 注⑥ 難儀した・・・苦労した



になって、行列が難儀なんぎしたこつもあるげな。まあ、昔話むかしばなし
とすつと小めけんどん、よう今まじも伝えられてきたも
んよなあ。

日向の国のいよすんぼ

日向の国でも、河童は各地にすんでいて、カワタロ、ガワ

タロ、ヒヨスボ、ヒヨオスンボ、セコ、カリコサマなど、いろいろの名で呼ばれていたげな。中でも高千穂付近には河童のすみかが多く、五ヶ瀬川の上流には五つの支流があったが、その流れの一つに河童の頭目^{注①}がいた。七折川には綱の瀬の弥十郎、山裏川には川の詰の勘太郎、岩戸川には戸無の八郎右衛門、押方の二上川には神橋の久太郎、三ヶ所川には廻淵の雑賀小路安長、この五匹の河童がその頭目じゃ、と伝えて

いるげな。
こんげな河童の話もある。
むかしむかし、門川の中山神社に、金丸どんとよぶ神官がいたげな。金丸どんは、剣術にも優れ、その武勇は近郊に知られていたげな。ある晴れた秋の日のこと、金丸どんが、村の土橋を歩いていると、橋の下からヒヨオスンボが、ひよいと顔をのぞかせたげな。

「なんだ、ヒヨオスンボめか、あんまり悪さするといかんぞ」
金丸どんはそう言って、そのまま通りすぎようとした。すると、
「金丸どん、金丸どん、そんげ言わんと、俺りが話も聞いて

くださり」

ヒヨオスンボは急に、あわれな声をあげて、金丸どんを呼びとめたげな。

「金丸どん、俺りや、ぎょうさんな子宝にや恵まれちよつとじゃが、こん川ん大蛇が、毎晩毎晩やちきて、俺りが子を、ぼうど飲んでほつちくとじゃが。ほつで、いま一匹しか子が残らんとじゃ。聞けば金丸どんは、えらい剣術が達者なげな。一つ頼みますので、金丸どんの力で大蛇を退治してくださらんか」

金丸どんは、ヒヨオスンボの頼みを聞くと、
「ええが、ええが、俺りがうまいと大蛇わるを退治してくるぞ」
と言って、ヒヨオスンボと約束をしたげな。

その晩、金丸どんは身ごしらえをして、土橋の下にたたずんでいたげな。しばらく待ちかまえていると、大蛇が出てきた。星明かりに黒々と波だつた大蛇の背が巻いていて、生き残つた最後の子ヒヨオスンボを呑むために、やってきたげな。
金丸どんは、すかさず大刀をふりまわし、するどい早業だつ



【河童塚】

都農町、徳泉寺にある河童塚。その昔この寺の和尚さんが、お経を書いた石を川に沈め、河童のいたすら



た。さすがの大蛇も一刀のもとに息絶えてしまったげな。

みごと大蛇を退治して、土橋に上がってきた金丸どんの前に、肩間のヒヨオスンボが立っていたげな。

「金丸どん、おおきに、おおきに。これでわちも、今晚からよう眠れますわ。それで、金丸どんに何かお礼をしてっちゃんが」

こう言われると、金丸どんはすぐに思いつき、時々、村の子どもたちが、ヒヨオスンボにいたずらをされて、おぼれそうになるので、

「そんげいえば、おまえが悪さをせんごつ頼むわい。俺りが子孫だけでん、悪せんごつすつとじゃぞ」

「はい、はい、金丸どん。ようとわかりましたが、あんたん孫子さんにや、けつして悪さしませんげな」

ヒヨオスンボは、こう約束すると、また土橋の影へ消えていったげな。

それから村の子どもは、川で泳ぐ時にや、

「ヒヨオスンボ、ヒヨオスンボ、金丸どんの一党じゃ、悪さすんなよ」

と唱えながら、川へ飛びこむようになったのじゃったげな。



注① 頭目・親分
 注② ぼうど飲んではちちく・丸のみにして去っていく
 注③ おおきに・ありがどう
 注④ わち・私

うるし兄弟

むかしむかし、米良山の小川の木浦というところに、うるしかきの兄弟が住んでいたがな。兄弟は木地くりをしながら、うるしかきの時期になると、うるし採りの仕事をしやっただげな。

ある日、弟と別れて、うるしの木を探しに出かけた兄は、谷の奥に大きなうるしの木が、ぎょうさん茂っている場所を見つけたげな。

「んにや、こりや、えれもんじや。しやてにや、黙っておかにや」

兄は来る日も来る日も弟には内緒で、その場所に出かけて行った。そして兄はこのことが弟に知られんごつ、採ったうるしを竹の筒につめて、近くの洲の底に沈めておくことにしたげな。

ある日、二人は球磨表に、うるしを売りに出かけた。ところが、この日の兄のうるしは量が多くて質もいいので、とてもいい値段で売れた。弟は驚いたのなんの。弟は、

「おかしなこともあるもんじや」

と不思議に思い始めたげな。

そんなうち、兄がこっそりと家を出て行くのを知った弟は、

その兄の後をつけて行ったげな。すると、兄は深い洲に潜っては、竹筒を取って上がったて来たげな。

「なんばすつとかいね。んにや、タカンプン中け、うるしば入れて洲ん底けえ入れとつとじやわい。とうとう見つけたぞ」
弟は兄に内緒で洲に潜り、兄の隠したうるしを横取りするようになったげな。

二人は、またうるしを売りに出かけたげな。すると、この日のうるしは二人ともいい値段で売れた。

「どうもおかしなことがあるもんじや。そういえば、どしてん、タカンプがちつとずつ減つとつたもん。しやてが引きあげたつちやねか」

と兄は思ったげな。兄はせつかく採ったうるしを盗られまいと、球磨表に出て、木彫りの龍を手に入れて洲の底に沈めたげな。

「俺が見つけたうるしば、盗られてたまるもんか。これで、しやても腰ゆひん抜かすじやる」

と洲から上がったげな。

二、三日経って、また弟は兄に隠れて、こっそりと洲に



【木彫り竜】
社殿入り口で勇ましく参拝者を迎える児原稻荷神社（西米良村）の木彫り竜たち。二百年以上も前に作られており作者は不明である。

潜もぐったげな。ところが、そこには恐おそろしい龍りゆうがおり、弟おとうとに向むかって襲おそいかかってきたげな。

弟おとうとはあわてて淵ふちから上あがり、兄あにに、

「すりよよい、ぼくじやが注①。あそこの淵ふちにや、ふてえ龍りゆうがお注②つど注③」

と伝つたえた。兄あには、

「よしよし、効きき目めがあつたわい」

と翌よく日じつ、うるしを淵ふちに沈しずめに行いったげな。なんと木彫きぼりの龍りゆうが、本ほん当だうに生いきちよるじやないか。

あわてて淵ふちから飛とび上あがった兄あには、

「そげん、馬鹿ばかなことあるもんか」

ともう一度潜しちどもぐってみたげな。それでも、やっぱり龍りゆうは火ひを吹ふき、襲おそいかかってくるかい、兄あにはほうほうのていで注④、岸きしには

い上あがったげな。

弟おとうとを驚おどかすはずの木龍もくりゆうが、本物ほんものの龍りゆうになるとは思おもってもみ

らんかった。

「こんままじや、うるしも採とれんし、兄弟喧嘩きょうだいけんかしとつたら、

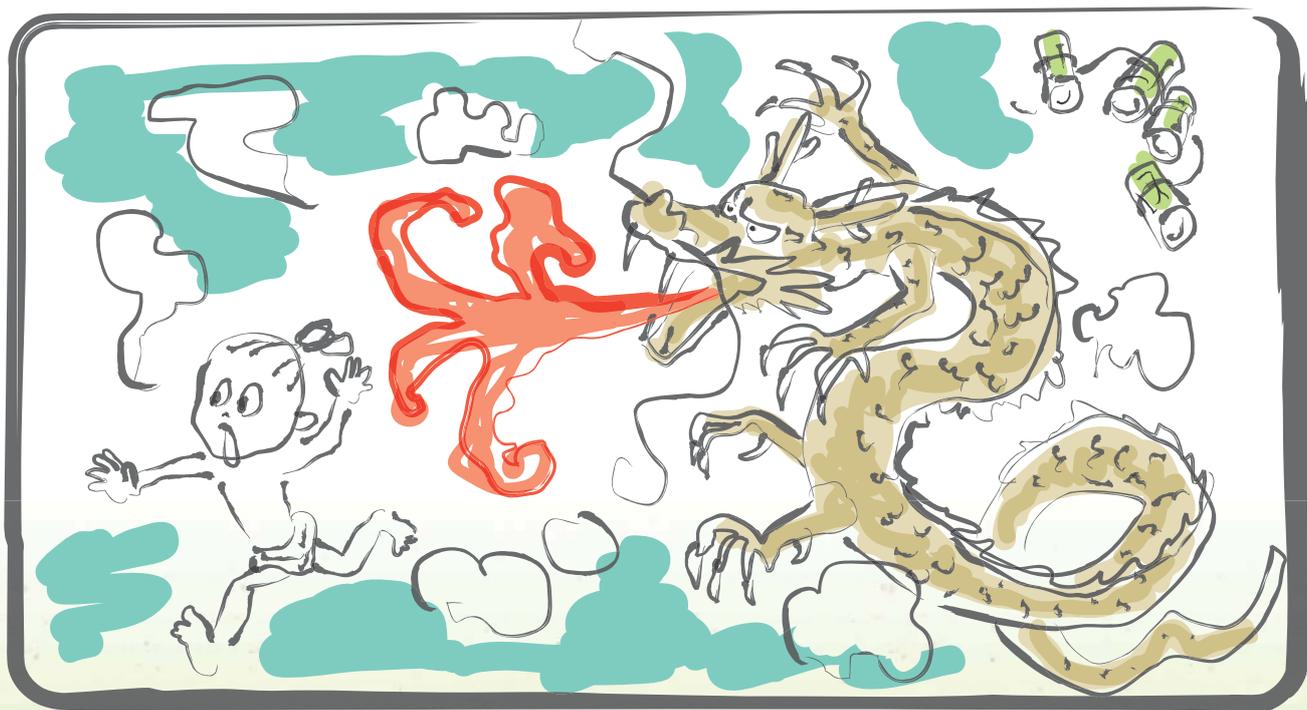
なんもかんもだめじや。こりからは、二人ふたりで仲良なかよう仕し事ごとばし

て、うるしも仲間なかまで採とれるようにすればよかるつ」

こうして、兄弟きょうだいは仲良なかよく仕し事ごとを続つづけ、豊ゆたかに暮くらしたとい

うことじゃったげな。

ともうす、かつちん。



注① ぎょうさん・たくさん
 注② しゃて・弟おとうと
 注③ タカンポ・竹たけの筒つつ
 注④ どしてん・どうしても
 注⑤ すりよ・兄あに
 注⑥ ぼくじやが・大たい変へんじやが
 注⑦ おつど・いるよ
 注⑧ ほうほうのてい・やつと
 のことにで逃にげて

海の水は塩が辛い

むかしむかし、あるところに、ぼっけもん^{注①}がおって、みんな、ぬけさく太郎^{たろう}と言^いっていたげな。ぬけさく太郎^{たろう}は船^{ふね}に乗り^のてして、たまらず、

「船長^{せんちやう}さん、船^{ふね}に乗^のしてくれや。船^{ふね}に乗^のしてくれや」と拜^{おが}むごつ頼^{たの}んだげな。

それで、船長^{せんちやう}さんは、ぬけさく太郎^{たろう}を船^{ふね}に乗^のせてやっただげな。ぬけさく太郎^{たろう}は、みんなから尻^{しり}にしかれて、

「ぬけさく、ぬけさく、ぬけさく太郎^{たろう}」
と言^いって船^{ふね}の掃除^{そうじやく}役^{やく}じゃった。

そして、その船^{ふね}が港^{みなと}さね着^ついて、船長^{せんちやう}さん一人^{ひとり}残^{のこ}して、みんな陸^{おか}へ遊^{あそ}びに行^いったげな。ぬけさく太郎^{たろう}は、どこへも遊^{あそ}びに行^いかんで船^{ふね}に残^{のこ}っていたげな。すると、船長^{せんちやう}さんが、
「ぬけさく太郎^{たろう}、お前^{まえ}も遊^{あそ}びに行^いって来^こいや」と言^いった。

そして、ぬけさく太郎^{たろう}は、ある婆^{ばあ}さんところへ行^いったげな。すると婆^{ばあ}さんは、ぬけさく太郎^{たろう}を子^こどもごつ、もぞがって、
「お前^{まえ}、何^{なに}が欲^ほしいか。何^{なん}でも欲^ほしいものを食^たべさせてやるがよ」

と言^いった。すると、ぬけさく太郎^{たろう}は、
「俺^{おれ}は海^{うみ}で育^{そだ}ったかい、ウナギが食^たべたい」と言^いった。

「ええウナギかい。ウナギなら、おやすい御用^{ごよう}じゃ」
婆^{ばあ}さんはそう言^いって、押^{おし}入れからヒキ臼^{うす}を出^だして、

「ウナギ出^でる、ウナギ出^でる」
と歌詠^{うたよ}みを言^いつと、ぎょうさんウナギが出^でた。それで婆^{ばあ}さんは、ぬけさく太郎^{たろう}にウナギのご馳走^{ちそう}を食^たべさせてくれたげな。

ぬけさく太郎^{たろう}は、たつぶりウナギをご馳走^{ちそう}になつて、帰^{かえ}ろうとした。すると、婆^{ばあ}さんが、
「私^{わたし}は年寄^{としよ}りで、もうこのヒキ臼^{うす}はいらんかい、お前^{まえ}にあげよう」

と言^いった。そうして、このヒキ臼^{うす}にや、歌詠^{うたよ}みがあつて、
『何^{なに}それ出^だしてくれ。ヒキ臼^{うす}さあん』と言^いって、何^{なに}それ出^でてくると、『ありがとう、おおきにい』と頭^{あたま}を下^さげにやならんとヒキ臼^{うす}の使^{つか}い方^{かた}を教^{おし}えてくれたげな。

それから、ぬけさく太郎^{たろう}はヒキ臼^{うす}をもろうて、船^{ふね}に戻^{もど}った。そして、一時^{ひととき}すると、ある戦^{いくは}が始^{はじ}まったげな。戦^{いくは}は負け戦^{いくは}がよ



【石臼】

米^{こめ}を年貢^{ねんぐ}として納^{おさ}めていた時代^{じたい}の農^{のう}民^{みん}は、手元^{てもと}に残^{のこ}ったヒエ・アワ・麦^{むぎ}などを石臼^{いしうす}で粉^{こな}にして食^たべていた。

- 注① ぼっけもん・・・間拔^{まぬ}けな人^{ひと}
- 注② もぞがって・・・かわいがつて
- 注③ ヒキ臼^{うす}・・・回^{まわ}して粉^{こな}にする
- 石臼^{いしうす}
- 注④ やつつけた・・・倒^{たお}した
- 注⑤ ききん・・・食糧^{しょくりやう}が非常^{ひじょう}に不足^{ふそく}すること
- 注⑥ ようと・・・よく

になって、どんどんやられてしまった。ぬけさく太郎は、

「もっと兵隊を出してあげたら、殿様が喜ぶじやろうなあ」

と思うて、婆さんにもろうたヒキ臼を出して、

「兵隊でろお、兵隊でろ」

の歌詠みを言った。するとヒキ臼から、大きな棒をにぎった兵隊がぎょうさん出てきて、敵をやっつけたげな。それで殿様が、ぬけさく太郎をよんで、

「ほつびをあげようが」

と言ったら、ぬけさく太郎は、

「何もいりません」

と言った。それから、船長が、ぬけさく太郎が、ヒキ臼を持ちちよることを知った。ちようどそのころ、塩のききんで塩をこしらえたら、ぎょうさんな金儲けになると思っ、船長さんは、ぬけさく太郎のヒキ臼を盗んで、

「塩出る、塩出る」

と言った。そしたら、ヒキ臼から、どんどん塩が吹きだした。

ところが船長さんは、歌詠みをよつと知らんで、お礼の言葉が判からんかったかい、ヒキ臼は塩吹きを止めずに、船じゅう塩の山になって、海の底に沈んでしまった。

それで今でん、海の底でヒキ臼が回るかい、海の水は塩からいげな。

ともうすかっちり、かっちり山に火がついた。



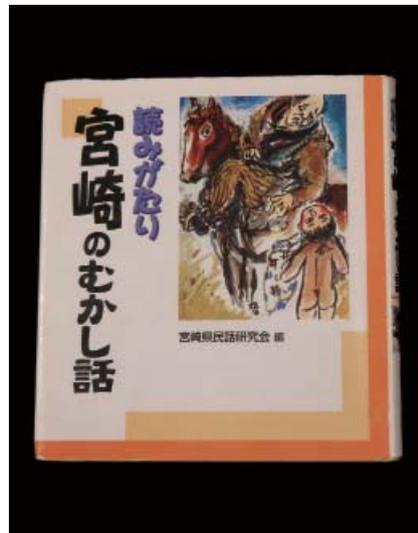
みんなのへんかんれんとしよ
民話編 関連図書



『ふるさとのお話の旅 12 宮崎
宮崎のげなげな語り』
野村純一／監修 矢口裕康／編
星の環会



『「個育て」のために 民話と保育』
矢口裕康／著
清文堂



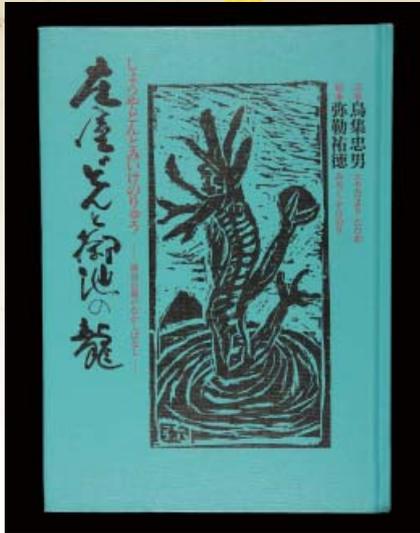
『読みがたり 宮崎のむかし話』
宮崎県民話研究会／編
日本標準



『方言民話 はんぴ話』
寺原重次／著
鉦脈社



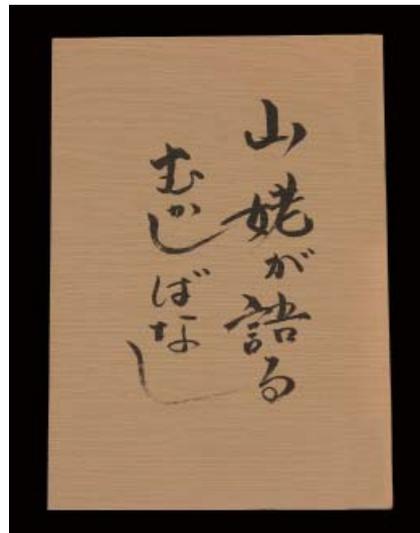
『民話集 河童の遠征』
中村地平／著
鉦脈社



『庄屋どんと御池の龍
— 霧島山麓のむかしばなし —』
鳥集忠男／文 弥勒祐徳／絵
鉦脈社



『宮崎のむかし話』
比江島重孝／著
鉦脈社



『山姥が語るむかしばなし』
竹原由紀子／編
個人出版



『ときが原の女ぎつね』
鬼塚栄子／文 高山恵美子／書
川口道子／画
鉦脈社



『日本の伝説 31 宮崎の伝説』
比江島重孝・竹崎有斐／著
角川書店